明治廿二年二月十五日發兌

# 以良都女

第二十號

東京 成美社

# いらつめ第二十號目次


**家政。**

料理法‖兎の玉子煮、スパニッシユ、ブリッタース‖華を洗ふ法‖梅の花を三年貯へる法‖革のまはえならぬ法‖万年糊製造法‖白無垢の垢を落す法‖甘諸百珍

**文藝美術。**

二月十一日憲法發布歌（美妙齋）
柳五首（佐々木弘綱）
柳一首（孤芳女史）
鶴三首及び故郷松三首（佐々木信綱）
四季の遊今様四首（東宮鐵晉）
唱歌する時の身体の位置第一‖立唱の位置第二坐唱の位置‖口‖舌‖氣息の技習‖横膈膜の勢力を増し其運用を強壯ならしむるの練習‖脇筋を強壯ならしむるの練習‖胸筋を強固ならしむるの練習
雑則（夢の屋ろをる）
柳櫻都錦繪二幕目（立花屋かをる）
源氏物語まなびがき‖桐つぼの條

**雜纂。**

訓盲啞院の卒業
天保八年の女學校設立案
日本の小兒

**小說。**

をざ巻（加納雨柳齋）

**寄書。**

如何にして女子を教育すへきか
枕草紙まなびがきに就て
秋田訛に就て

**批評。**

いさり火
將棊の磐（美妙齋主人）
蝴蝶（不知庵主人）

**通信問答**

枳殼と硼砂とを賣る店‖家政讀本‖風を引かぬやうにする事‖祝賀に松竹梅を用ゐる事‖聲を清くする法‖ホグロを去る事‖手の色を白くする法‖齒の黄色を去る法‖髪毛を保存する法‖おそび毛を延ばす法‖身体の肥滿する法‖眉を自由にする事‖記臆をよくする法‖上戸を下戸にする法‖十七八歳の令孃の衣裳見立‖視力を強くする法‖二十一二歳の令夫人の衣裳見立‖白髪を黒くする法‖鹽酸アンモニア及び硼砂と硼酸‖毛を薄くする法‖ワキガを除くム

**懸賞文藝。**

懸募得点
歌（竹柏園女史）、（高橋滿喜太郎）
文（藤梅予）、（雲のや）（一眞齋）

**餘興。**

謎　懸賞　金港堂小說一冊

**月報。**


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# いらつめ第二十號

## 家政

### いらつめ料理

#### 第三　兎の玉子煮

兎の肉を取り、輕く湯出、それから胡麻の油で揚げて後、更に別の鍋を取り、その鍋の中へ玉子を割ッて入れ、玉子一の三分の一ほどの牛乳を加へ、玉子を充分に攪亂し、之に醤油と味淋で味を付け、前に揚げた兎の肉を此中へ入れ、烈火に掛けて煮るのです。玉子の數は兎の肉の多少に因ります。適宜に見計らッてよろしいです。

#### 第四　スパニッシュ、フリッタース

麵包を薄く切り、ブランデイをすこし灌掛け、玉子二つ、小麦粉猪口に二盃及び牛乳猪口に一杯、これら三色を攪合はせ、それを麵包に塗ッて半時間ほど空氣にさらして置き、それからバタで揚げるのです。



### ナメシ革を洗ふ法

酸漿（植物の名）汁をすこしばかり湯に垂らし、その湯をスポンヂに付けてそれで洗ふのです。

### 梅の花を三年貯ふる法

梅干の肉を壺の內の肌へ付け、梅の花の枝を小さく折り、その枝を梅干の肉へ挿し、枝はなるたけ深く肉で隠し、言はば梅を植ゑた心持にし、さて花へも肉の觸れぬやうに爲、壺を密封して置けば年久しく經ても梅の花は生のとほり保存されるもので、夏秋冬の頃に之を取出して膳部の化粧とするかあるひは吸物へ放そろ、いづれにしても興が有ります。

### 革のこはくならぬ法

水にあふと革はこはくなるもので、之を防ぐには水一升に柿の葉百枚を入れ、五合に煎じつめ、この汁を切藁で革の裏へ三度ほど塗るのです。

### 万年糊製造法

常の米の糊に酢を合して解き、これで紙を繼いで雨障子でも張れば決して離れません。

### 白無垢の垢を落す法

白無垢は晴天の日によく乾し、乾たところで天鵞絨の切でそろそろこすれば垢は美事に落ちます。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 甘藷百珍

嬢此頃色々の書物を出して見ますうち甘藷百珍と云ふ書物がムいました。　豆腐百珍はありふれてをりますが甘藷百珍は耳新しうムいますからおなぐさみの爲め御覽に入れます。中にはおいしさうなのもムりますからお試しなさッて御覽なさい。一度に澤山御覽に入れたいのでムいますが貴重の紙面故少しづゝ御覽に入れます。　　　　　　松　嬢

（一）かまぼこいも　生にて擦し汁氣をしぼり麪粉少し入れ板につけ蒸なりむしあげて罌栗かまた青海苔の粉を付て小口より切るまゝ(十七)五色の中にて好次第色を付る奇麗なり。

（二）ちくはかまぼこいも　生にて擦し汁氣をとり麪粉少し入れ竹に巻き蒸なりむしあげて酒を塗り火にかけてやき目を付け小口切にす。

（三）のりまきいも　完にてむし皮を去り銅篩にて濾し淺草海苔を展べその上へ厚さ一分位にむらなしに延し小口より巻て切るなり。

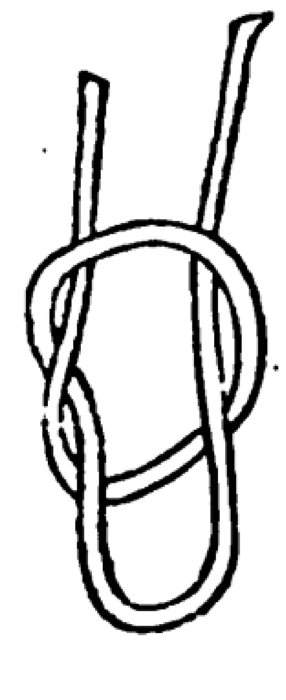
（四）昆布巻いも　生にて擦し麪のこ少しばかり合せ棒の如くをりて上を極上の青昆布にて巻き其上を竹籜にて包み糸にて括り蒸すなり

（五）御手洗いも　生にて擦し麪粉少し入れ金柑の大さに取りて蒸しあげ青竹の串に五ッ宛さし砂糖醬油を付燒にする。

（六）茶巾いも　蒸て馬尾篩にて濾し(十六)好次第に色付け布帛にて程をきめ裏て捻る

（七）苞苴いも　生にておろし麪粉を少し入れ蒸て棒の如く取り竹の簀に巻き少時おきてとり出し調味好次第にすべし

（八）結びいも　生にて巻剝にして又舊の如くに巻きな小口切に細くきり稀醬油を煮たゝせ右のいもをざつと煮上げて結ぶなり隙とりてハ切るなり



（九）友巻いも　大きなる藷を生にて剝きざつと湯煮し（六十三）蒸藷を馬尾篩にて濾し剝いもに展し小口より巻き小口切にす○濾しいもを色付にしるゝば猶々佳しいろ付法（十七）に記るす

（十）巻鮓いも　随分大きなるものを生にて剝きざつと湯煮してひろげ其上に飯を二分程の厚にむらなく一面に置き○蒸藷れ馬尾篩濾しを紅藍染青粉染鬱金染三色にして模樣とり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よろしく置ならべ小口より巻死布帛につゝみ緊とかためて
小口切にす

(十一)切鮓いも　生にて角にきり夫を竪に半分ほどの厚さに片
ぎざつと湯煮し鮓桶に竹箄をしき右のいもをひーとならべ
○常の鮓の如く飯に加料好次第交せあれせゐもの上へ三四
分位にならべ置きまたいもを一遍置き又飯ゐもと幾重もし
きて竹箄にておさへ壓をかけ鮓れやうに切りて鉢に盛るな
り

(十二)腐皮巻いも　(六十三)蒸いも馬尾篩濾しにして平腐衣水
に浸し置き板にのばしいもを一分ほどの厚さに付け巻て小
口切　製(三紫菜巻いもに同しいろ付好次第(十七)にするす

(十三)罌粟纏いも　生にて擦し蒸して圓く取り罌粟にて纏す○
紅染の罌粟を用てよし

(十四)まくりゐも　生にて擦し麺粉少し交せ蒸して打展ばし味
噌をよく擂り其上へ一分程敷て小口より巻てきるなり

(十五)射込いも　よく熟したる柚を小口少し切り中の實を去り
○いも生にて擦し麺粉少し入れ右の柚の中へつめ蒸して小
口切にしみりん酒にて遣ふ
△柚の代に饅頭の餡を去りて用ゐるもよし

(十六)鶏卵割いも　蒸いも馬尾篩濾し紅にていろつけ白礬少し
入交あわせ棒の如く取る○(六十五)いもの精を水にてとき
稀葛の如く烹き冷し置是にていもの精の粉をぶんでの如く
潑一分程に展し右の紅染の棒のいもを巻きざつと蒸して冷
し小口切

(十七)色付いも　何色にても蒸しいもの馬尾篩濾しを用ふべし
△赤色は紅藍を押交てよく淺紅深紅好みによるべし△青色
は青粉を押交てよし△黒色は釜底墨を用ゆ五色に染るとき
も黒色を除て紅に青粉交合せ紫色を作るべし△白色は(六
十五)いもの精に色を付る至て白くなるなり△黄色は山梔
子をきざみ水に浸しその汁を交てよし△右のいろ付の諸五
色ともちゐさく圓め色を取合せ菓子に遣ふて甚よし尤砂
糖を交合すべし是を五色いもと云ふ

## 文藝美術

二月十一日憲法發布　美妙齋主人

うゑと　ともに　さく　くにの　はな、
いざ　かざせ、　やまと　くにたみ。
たまの　つゆ、　ちしほの　しぐれ、




Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

やりの くひ、つるぎの まがき、
ひとえぶふ ちよの いのちを
ろへに ける 世さへ ありしを、
うれしくも いと やすらかに
はるの 香を けふ わかつ かな。
いざ かざせ、やまと くにたみ。
ろせに ちらぞ、ろせれ 香を ふた、
ゆきに おちず ゆきも ぬろ 假し、
くにの れな、ちよの この れな！
ちり そます、こゆりにも あむ
いざ かざせ、やまと くにたみ。
もりたてよ 政治の ろひな、
つちかへよ 道理の そき くは、
いのち あり、まの くまの はな。

柳　　佐々木弘綱

つゆ・みえて わさろせ きよく なびく あり、
つらぬき とめぬ たまの を＝やなぎ。



けふり より おちくる みづ と みわたせば、
かれかみ すべて やなぎ なり けり。
たつ なみに まじる けふそれ かれぎしの。
やなぎを かせの わたる あり けり。
いひしらぬ おぼろづきよの けしき かな。
やなぎの えだに かげ かそみ つゝ。
あみの しわ みゆる みぎれの おいやなぎ、
おもはゆげにも つくる まゆ かな。

柳　　孤芳女史

をちかたは ふくも ふかぬも わらなくに、
かせを みせたる ゆをやぎれ いと。

鶴　　佐々木信綱

かくながら うつしと兆ばや ふたみがた、
まきゑの まつふ たづぞ たちまふ。

つき さゆる すまの うらわの しほさゐふ
たづがね きよし たかさごの まつ。
なにはえの わしまを くゞる たづ みれば
ちよの さかりも ある よ なり けり。

故鄕松

ふるさとに いろも かはらず さかえ けり、
まつ あそ ものは おもはざり けれ。
ふるさとの あれはて ぬれど その かみの
かはらぬ ものの さと まつの いろ。
ちよ へけん わうたの よとせ いつとせに
まつの うたえは なく なりに けり。

四季のあそび（いまやう）　本宮鐵管

むつたま あへる ともびとを
いざ もろともに うちつれて
すみだがはらに けふ ひとひ
さくらがり して あそばなん。（春）

むつたま あへる ともびとよ、
いざ もろともに うちつれて
ねぎしの さとに このゆふべ
ほたるがり して あそばなん。（夏）

むつたま あへる ともびとよ、
いざ もろともに うちつれて
たきのがはべに けふ ひとひ
もみぢ かざして あそばなん。（秋）

むつたま あへる ともびとよ、
いざ もろともに うちはれて
うへのゝ やまに あの あした
ゆきを ながめて あそばなん。（冬）

昨年より述べ來つゝ樂典初步の話はまだ少々殘つて居れど

それは次號に送り本號には唱歌する人の心得となるべき事項を聊か述べんとす　　夢の屋かをる

唱歌するときの身体の位置。

第一　立唱の位置。

(1)兩踵は近く接して一線に在るべし。

(2)兩足は外の方に開き凡そ六十度の角をなすへし。

(3)膝を眞直に伸ばすへし。

(4)胸は別に強制を加へす自然に充分に開張すべし。

(5)兩臂は優に兩わきに垂るへし。

(6)兩肩は同一の高さになすへし。

(7)肩胛骨は平らになすべし。

(8)頭は高く直く頂上まて伸ばすへし。

(9)全体は充分に高く伸起すへし。

(10)体は少しく前の方へ傾け其重量を「土フマズ」の部にあらしむへし。

(11)兩眼は前の方を直視すへし。

(12)全体の形は耳、肩、腰、膝、踝をして一直線にあらしむへし。

第二　坐唱の位置。

(1)身体は務めて眞直になすへし。　但硬くすへからす。



(2)胸部はつとめて開張すへし。

(3)肩は背に送るへし。

(4)頷は少しく上ぐへし。

(5)兩手は輕く組んて膝に置くへし。

(6)兩足は外に開き大凡六十度の角をなすへし。

(7)背は全く椅子より離すべし。

口

口は母韻をかたちはくるの模型なれば種々に開合してその形を定め何時でも各母音を清く正しく發し得らるゝ様に練習すること肝要なり。

口の開きの廣きにすぐるも開きの足らさるも共に宜しからす大概開韻には指二本を容るゝ程に開き他の韻には一拇若しくは一指の廣さに開くべし。

母韻を正しく發し口に美形を與るに必要な練習は次の如し。

(1)口中に指二本を縦に置き適宜の一律にてA及びOの音を數回發唱し然る後指を去り口を最前の形に保ち同母韻を反覆すへし。但Aを發するには兩唇を少しく後に引きOを發するには兩唇にて指を丸く包含すへし。

(2)E I及びUの音には口中に指一本を横におき前法に準し

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

て練習すへし。

舌。

舌は種々の母音を邪魔せぬ程に口中に平らかに横はらしめ舌頭は下齒の裏にあて、舌根ハ充分下に保はへし。

氣息の練習。

(1) 口中を成たけ狹小にすぼめて徐々に大氣を吸入し肺臟を十分に充たして暫らく氣息を留め然る後徐遲に呼出すへし。

注意　此練習を反復するに方り眩暈を起すことあらは直ちに頭を左右にふり搖すへし　忽ち治すると受合なり。

(2) 肺臟を充たして充實堅固な音聲にて大音に一、二、三、四、五六、の如く凡そ十個數を算ふべし但一個數毎とに聊かつゝ氣息を取るへし且つ其仕方ハ極めて安易なるべし彼の兵式体操の號令然たる猛烈の擧動ハよろしからず。

(3) 肺臟を極度の量にみたし更に十個數乃至十五個數を氣息を取らずに數ふへし且つ時としてハ氣息のつゞかん限り個數を増加するもよろし。

横膈膜の勢力を増し其運用を強壯ならしむるの練習。

(1) 肺臟を充分に滿たし手指を以て胃窩を壓し全時に肺臟より徐々に空氣を呼出すへし。

胸筋を強壯ならしむるの練習。

(1) 肺臟を充たし腰の左右の筋肉に拳をあてゝ壓抑しつゝ徐々に氣息を呼出すへし。

胸筋を強固ならしむるの練習。

(1) 肺臟を滿たし兩手を以て胸部を輕く打ちつゝ氣息を呼出すへし。

(2) 兩臂を前面に突き出し然る後力を籠めて後面に引き戻すへし。

雜則。

(1) 發音は務めて淸朗充實に且は自由になすをよろしとす。

(2) 天稟の聲でたやすく達し難い高聲を無理に發せんとするハ愚の至りなり。

(3) 毎日の練習は大抵二三時間を適度とすされど一回に三十分を踰ゆるは餘りよろしからず。

(4) 音階の練習は一日も怠るべからずされど無暗に怒鳴りちらすは感心せず。

(5) 聲變期には一日に練習十二分間を踰ゆべからず此期には高音、低音を強て唱ふべからず。

(6) 食事後間もなく練習するは宜しからず少くも一時間ハ休息



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すべし。

(1)唱歌するときには樂々と愉快な顔付をなすべし額に入り字を入れたり天井を睨んだりするとよろしからす。

(8)高音のときに頭を擧げ低音のときふ頷を伏せるは共によろしらそ。

(9)唱歌したれち直樣さむく濕つた空氣に身を曝すと甚たよろしからす。

(7)調子の整はざる「ピアノ」あとにて練習すると耳のために大毒あり。

---

作者謹ンテ御愛顧ノいらつめ方ニ御詫申すハ十九號掲載ノ分ハ人拜ミニ一月ノいそゝしき折リニ漸ク筆ヲ採リ直ニ印刷方ニ廻シ升タ故ニ實ニヲセタヽシキ誤リニテ中ニモ序幕身投ノ塲ヲ二幕ナド丶記シ十一頁ノ下欄ニ正作ノセリフニ安田トアリテ巡査ノセリフヲ秋田°トアルナゾハ…アレハ秋田カイトノデス其ノ他假名違ヒナドハ校合者ニ代リ幾重ニモ御免シアッテ大語爆烈彈ノ勇マシー捕物マテ御覽ノ程ヲ子カヒ升…美妙さんもかをるモ色々イソガシー故ツイ……

# 柳櫻都錦繪 二幕目

立花屋かをる作

塲割○神田立川邸奥庭の塲○同しく門外の塲○花垣閑室密談の塲○同しく清子部屋の塲



役割○立川芳雄○花垣元太郎○植木屋兼吉○小六○花垣妻清子實は竹山清子○車夫チョンまげ正作實ハ秋田ノ僕正作○壯士酒井忠國○同南條民三○同城戸孝吉○木曾川瀨平○書生淺井法三○同半田律助○僕番介○仕出二人竹本連中

本舞臺一面の平舞臺上手へよせて一間半許りの小座敷三方折廻し汚なき本椽付を苔蒸しゐる石の上り段壁の所ゞ敗れ落し跳ひ上下樹木の植込ゟて見切り此の後一面の黒塀少き出這入の口下にあるを樹木の陰ゞ母家の家根を見せたる書割石燈籠樹木など宜しく都て荒れ果たる誂ひの道具立川邸内離れ座敷の模樣宜しく座敷の中に芳雄毛の延びたる散髪着流病人の拵にて行燈の下に机に依りかゝり本を見て居るシンミリとした合合に蟲の音をあしらひ幕開く直ゞ床の上るりゞなる

上「行く空も雨もつ雲の定めなく晴れぬ思を奥庭の敗れ果てたる小座敷ゞ閉まめられて昨日今日朝夕をくる果敢あさを吊ぶ蟲の聲々に早秋報げて憐れある孤燈の下ゞ愁然と腕まぬきてト息つきト合方にあり(芳)思ひ廻せば廻す程世にも稀なる我不幸親類家扶等の惡策にて父ハ不在を幸ひト風癲狂者と披露なし母家をへざつ敗れ家に獄舍に等しき起臥

も指數れバ早六月舊藩士族や友人の幾度となく尋ね來るも病氣の障りと元園より固く拒んで退く由小藩ながら一城の主と云れし其の者が在るに甲斐なき此の有様…然シ此等は一家の興廢深く憂しとは思ねど彼の朝鮮王殿下には内に佞臣讒者のはびこり外には支那に牽制され國政万事も自由ならず之をこの儘さし置かば國の獨立おぼつかなく他の屬國と爲らんと鏡に掛けて見る如しさする時には其の隣朝鮮のみか我國に及ぼすと明なりト當春よりして花垣始め有爲の壯士と同盟し密かに彼の地に渡海の上事大黨等を誅罰し殿下を一國帝王と奉らんと企つうち降つて湧たる此身の仕儀たとひ一人欠くるとも彼の大望は成就せんが連なるとのなちさるは返す〱も殘念至極と悔し死仕打　上「身は一生を埋木に花咲く春に得逢ざる不運ハ何の因果ぞとてぶしを握り悲嘆の涙折り柄下部の夜廻り」ト下手塀ノ出入り口より番助好の拵ひ夜廻にて提灯を持ち出來り（番）モシ〱先き十時をうち升たから早く燈を消して御休みなさい本もイー位よみなされませ返ッて病の毒になる升す　上「せき立つ言葉に芳雄は見返り（芳）誰れかと思つたら番助か不作法至極ト

上「叱りつければセヽラ笑ひ（番）ソンナ豪情を言ふのが氣狂ノ証據ですワ　上「御免なされと燈を消んと立つを突き飛し」ト芳雄ハ怒ッて番助を下に手荒く突き落し（番）アイタ……若様ヒドイではムりませんか（芳）マダ〱申そか用捨はせぬぞ　上「許しはせじト立ち上れば此方もビックリ頭を押へ（番）氣狂殿には堪ぬ〱……　上「此免々々が口の中とつかは逃て行く跡を見送〱無念の涙堪ひ兼てやハラ〱ト柱にもたれヂット仕打本釣鐘雨車になり雷鳴の音する（芳）コリヤ又降出て來か…　上「眠に就と戸を閉て薄き蒲團に伏柴のこる許なる憂思ひ暫し忘る假枕憐れ果敢なき風情也」ト芳雄ハ戸を〆てシホ〱と内に這入る跡雷鳴雨車益々烈しくなる　上「深渡る夜ハ丑滿か降そゝぐ雨に交る雷の音凄まじき其中を提灯袖に以前の番介」ト下手出入口ゟ番介笠を冠り提灯を袖に抱へ出來り（番）ヤレ〱恐シー雨ダー氣狂殿も寐たでアロ…コンナ晩が返てアブナイ…ドリヤシッカリト錠を掛やう　上「獨うなづき椽先へ近寄とする植込ゟ誰とは知ぬ弓手を延ヒハヲを突ばバッタリと息斷へたるを見濟して現れ出る怪の男と」番介ハウーンと氣絶するとたん笠を面深にかむり簑を着る男植込ゟ出て　上「四面うろがむうなづきつ椽先近く立ち倚る物音油斷ならそト戸を開き差出そ燈明吹消へて黑白もわかぬ眞の暗」芳雄ハ戸を開

き燈を出そと直に消る(芳)夜深に向ひ何者あるか 上「聲をしるべに夜の鶴子故は暗の夫ならで信義にあつき壮士が近より〱聲密め」ト男は差より(男)立川君〱(芳)左様聲音ハ花垣君乎(男)イカニモ先太郎でムる 上「これはと許り二度ビックリ」トこれにて男は簑笠を取ると花垣先太郎にてりゝしき拵ひ(先)聞しに違はず此有様苦辛の程は御察し申す」上「互に手に手を取替し悦び合ぞ是非もあき花垣倘も言葉をひそめ(先)兼ては謀計全く決し事チあげんは近きにあり然に君は閉居の身上夫故今夜の風雨に乗じ助け出さん手筈也 上「早く〱トせき立られ飛立ばかりにうれしくも(芳)要心厳しき邸内にどうして君は忍入しろ(先)ソレコソ出入の植木師の(芳)ソリヤ兼吉の手引にて(先)イカニモ裏口に車を置君の未來の約束ある彼小六殿共々に(芳)アノ小六までト一寸氣を替ひ 上「夢に夢みる有様に(芳)ナンニモ言ぬ辱ない(先)人目に掛らぬ其中に 上「又恐しき風雨の勢綾なき暗にひらめく雷光天の與へと兩人は裏手の方へ」ト上るりのあけ雷鳴風雨益々烈しく先太郎は芳雄を扶けて一散に向へ這入る此時番介息を吹返しビックリ仕打雷鳴はげしく本鐵砲ドント落雷ノ仕打番介は耳を押へて平伏にある

を道具替の知せ風の音にて道具廻る

本舞臺一面の平舞臺上手へ寄て立派なる冠木門左右黒塀此内ユ樹木の植込都て立川家裏門の体鼓にホロを掛たる二人乗の人力車一輛あり毛布にくるまツて車夫一人提灯を手拭にて縛居風の音にて道具止ト上手より仕出の夜廻二人棒を持出來り

○今夜の様な晩こそ氣狂が逃出かも知子ーゾ(口)ナニ〱朝から晩まで大勢で張番を爲て居柄大丈夫ざ(○)イヤ〱油斷は出來子ー此節は毎日〱御領分の士族だの色々の人が來は御家令様と議論をするサウダゼ(口)ことによると連出サウダ柄一層嚴重に番をしろとのとざ… イヤハヤ面倒ナとだ…」ト車夫を見つけ(○)コレ〱何をして居る(車)ヘイ餘り酷イ降で困り升から少々休ンで居升す…(口)サウカ早ク行〱(車)ヘイこれにて二人ハ下手に這入ル跡雨車止み時の鐘にて合方にあり下手より先太郎芳雄を扶け出來りホツト思入コレニテ車夫は提灯を出し(車)花垣様ーチーマンマト首尾能(先)ヤコレと四面に思入車夫は笠と毛布を取ト兼吉にて(兼)モシ若様兼吉でムり升(芳)實に其方は出入の植木師辱ないゾ(兼)モシ〱と兼吉は車の中に向て言ホロを明て前幕の小六頭巾を冠出て(六)芳雄様かと取縋る(芳)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何から何まで花垣氏(先)イヤ婦人と同車ハ返て宜し少しも早くと小六ハうれしき仕打ふて芳雄を助けて車に上る兼吉ハ梶棒を取(兼)そんなら御先へ(先)ウー少し早く兼ての所へ(兼)心得升ふと向へ行かゝる以前の夜廻二人出來り(ロ)(〇)怪し者ト擊て掛を花垣ハ押へ(先)茲かまわぞと急立る之にて兼吉は車を引て向へ這入る跡二人は振ほどいて(ロ)(〇)ナニをと懸を先太郎は美事に投退るを道具替りの知せ先太郎ハ向を見あミキット見得風の音ふて幕此の跡誂ひの鳴物にてつなぎ道具出來次第直に引返す

源氏物語まなびがき

桐つぼの條

野分ふちてにはかふはださむきゆふぐれの程、つねよりもおぼしいづるまとおほくて、ゆげひの命婦といふをつかはす。ゆふづくよれをかしきほどにいだしたてさせたまむてやがてながめおはします。

**譯** 野分が吹初めて俄に肌寒くなる夕暮などには殊さら思出すことが多いため、更衣の故の家にゆげひの命婦といふものをつかはそ。 夕月夜の景色の美事の中



ふ出してやッて後ハそこらを只眺めて居らッしやる。

**釋** て丶は桐つぼの更衣が亡くなッた後の主上の御嘆をしるすところです。

**評** 景色の叙し方おのづから悲しさうでそ。まづ景色から叙初めて感慨を持出す地とそる處、なみ〳〵の腕ではありません。

かうやうのをりハ御あそびなどせさせふまひしに、心ことなるもの丶ねをかきならし、はかなく聞出づる言の葉も人よりハことなりしけはひ、かたちのおもかげにつとひて思さるるもやミのうつ丶には猶おとりけり。

**譯** このやうな折には管絃のあそびなどもし、心と共に立變はッた物の音を搔鳴らし、その內一寸言出す言葉も何處やら他とは違ッて立優ッて居た故の更衣の樣子や姿が目の前にちらついて現はれるやうなのも闇ハうつ丶には劣つて居る。

**譯** 「やみのうつ丶には猶おとりけり」、これは「ぬば玉のやみのうつ丶はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」とある古歌から取ッた句です。「心ことなるもの丶ね」は非常の秀句でそ、どうもう



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

まく譯せません。

評　景につれて過ぎし日を思出すところ如何にも實境で、しかも「やみのうつゝ」の一句は強く結んで珍らしい句です。

命婦かしこにまかでつきて、かど引入るゝよりけはひあはれなり。やもめずみなれど人ひとりの御かしづきにとかくつくろひたてゝめやすき程にて過ぐし玉へるを闇にくれてふしゝづみたまへるほどに草もたかくなり、野分にいとゞあれたるこゝちして月影ばかりぞ八重むぐらにもさはらずさし入わたるみんなみおもてにおろして、母君はとみにえものものたまはず。

譯　命婦が先方へ着いて門へ入れば早様子があはれである。寡婦住ではあるが、一人かしづく人もあッたゆゑ何か繕立てゝ一寸見惡くも無く暮して居たが、もはや嘆に沈んでばかり居れて、草もたかくなり、野分に荒淋たやうに見え。そして月影ばかりが八重むぐらにも妨げられず指して居る、その南表に下着いて見れば母君はすぐさま口も利けず。

評　あれさびた秋の夕暮の家のけしき、妙味はとても言盡くせません。



いまゝでとまり侍るがいとうきを、かゝる御使のよもぎふの露わけいり給ふにつけても恥かしうなんとてげにえたふまじくなきたまふ。

譯　今まで生殘ッて居るさへ心ぐるしいかに、まして斯う内からの御使が蓬生の露をわけて御入りの有るのを見れば、なほしほ御恥しうございますと實にあらへられぬほどに御泣きになる。

評　理も言はずはじめまづ愚痴を言ふところ、そこは ち老女の景色が見えて居ます。

以上五六段の文章をつゞけて今日の中流体に譯して見ればまづ斯うです。—

野分が吹き立ッて俄に肌寒くもなれば平常よりも感慨は増すばかり。つねに主上もゆげひの命婦といふものに言付けて更衣の家の体を見せにおつかはしになりまそ。出してやッた頃は夕月夜の美事な時分。あとは茫然と詠めて居らッしやいます。此様な折は色々面白い遊びもし、物の音をもかきならし、そして一寸した言葉でも様子でも更衣

れ他より立優ッて居たその邊があり〳〵と目に浮んで來る工合、古歌に「やみの現は夢にいくらもまさらぬ」といひますが、この時の心持は却ッてその闇の現にも及ばぬばかり、心ぐるしいです。命婦が先方へ行ッて門へ入ッて見れば早樣子が哀です。昨日までは畏く人のあッたため寡婦ぐらしても何やら角やら見苦しくなくして居た宿。しかし、今日ではや愁嘆に凝ッてばかり居る故、草も高くなり。野分にいとゞ吹荒れたやうな住居。八重むぐらに妨げられず射入るものは月影ばかり。その月のさして居る南表から下立ッて見れば母君は家に居らッしゃいませぬ。急に物も仰らず生殘ッて居るのさへ心苦しいのに、御使までこの貧家に受けては御恥しう御座い升とて實に堪られぬ程御泣きなさいます。

## 雜纂

○訓盲唖院の事業　世には不幸の者多しといへども盲唖より不幸なるはなし昔も此不幸の境界に生れたるものは終身不幸にして終るのみならず父母兄弟をも共に不幸の海に沈ましめたりき。然るに慈善の人ありて此盲童唖兒をも敎育し能はざるとなきの理を悟り盲童の肉眼を開くと能はざるもよく其心を明かならしめ唖兒の耳を通する能はさるもよく其口を開かしめて以つて不幸を轉して幸福の生涯を送らしむるに至りしは誠に文明の餘澤といふべく無上の慈善事業といふべし。我訓盲唖院は事業すべて創設に屬し幾多の困難に遭遇せしも敎諭諸子は熱心忍耐親切を以てよく此の困難に打勝て近年漸く成効の端緒を開きたり。同院敎諭小西信八氏は大日本敎育會雜誌第八十一號八十三號に於て聾唖敎育と題して聾唖敎育の困難を説き其敎育上の苦心と經驗とを述べ更に同院卒業生高木愼之助氏外二名在校中の學事履歷を詳述せられたり。余輩は之を讀て敎諭諸子の苦心を察し其熱心に感じて覺えず袖を絞り唖生の父母に贈るの書簡唖生が喜びを述ぶるの演説筆記を讀み驚喜の餘感涙を催しき。余輩は全雜誌中より小西敎諭が「高木愼之助初三人に就」との演説筆記の全文を轉寫して訓盲唖院の事業を廣く天下に告白し不幸にして不具の子を持る父兄達をして其子弟の不幸を轉して幸福となすの道あることを知らしめ併せて敎諭諸子が熱心苦心忍耐親切よく此困難なる大業を遂ぐるの端緒を得られたるを祝し尚益此事業を繼續擴張し天下の盲童唖兒をして悉く其恩澤を享しめられんことを熱望するものなり。

いらつめ記者

### 高木愼之助初三人に就き（大日本敎育會總會に於て）　小西信八氏演説

予は今日此盛會の演壇に於て平素の所思を述べ清聽を煩はし總理閣下初會員諸君の知を辱ふせるは滿悅に堪へず深く謝する所なり。是より同伴せる生徒等の長所を來會諸君の覽に供し批評を仰かんとするに當り先づ生徒の履歴の大略を述へ以て諸君が試問及批評を與らるゝに便す。眼鏡を掛けたるは横濱の者にて高木愼之助と申し十九歲なり明治十四年四月の入學にして人と爲り溫良謹直又極めて勉强なり其父は茶商なりしと云ふ、其性斯の如なるを以て舊名新之助なりしを樂善會發起員中村敬宇先生訓盲院々長たりし高津柏樹君等の周旋にて愼之助と改しと云。讀、書、算、圖畫及裁縫等優等にして常

に皆第一位を占め而かも極めて謙遜なり記臆牢確にして一旦學得たる者は之を失念すると殆んど之れ無し此生の教場に於て學習する法ハ了解する迄質問し歸舎する后毎夕復習するには教場手扣の筆記を閉ぢ傍ふ置き石盤に暗記して止まず一語を誤らざるふ至り筆記を反古となし之を保存することなし。其前には必ず改作活用して是正を乞來るなり所謂一隅を擧げて三隅を反するの人は是等を云ふろ。されば本年七月育啞學校創立以來初て一人先つ尋常科圖畫及裁縫科の卒業証を得たり其讀書の力運算（珠算筆算共二）の妙毎度參觀者を感ぜしむ。校用の算事ふは此生の手傳を借ると屢なり然るに謙遜ヱして隱退するを以て其技量を人に知らるゝこと遲しと雖校内に於ては盲啞兩生共に此生を推し敢て此を犯す者なし又深切公平にして幼年生及び盲生に對して好惡偏陂なく世話するの懇篤なる實に他の儀範たり。左れば盲生も一般に啞生を卑下するの僻あれとも此生をバ尊敬して措かざるなり。又一昨年專修科を設け彫刻指物裁縫圖画等を撰バしめしに他生は是と云ひ彼と云ひ或ハ彼と云ひ是と云ひ當初數月の間は變換定らさりしが此生一人は當初より斷乎として裁縫圖畫と決心せり。常人にも稀有の斯かる美質あるも其聾啞なるゝ故に家を相續せぞ養子に家を讓らざる可らずとは亦悲しからずや。今日予と生徒とは相互に筆談其他を演習せぞ全く會員諸君中有志ハ方々の此三名を御任せ申し諸君の試驗を請はんとす。此生ふ向ひては諸君が讀方又は算術を試みられんことを希望す裁縫ハ尤も長技にして人々皆此生の裁縫を望ミ相應の賃錢を得れども今日之を演ずる能はざるを同生の爲め憾みとする所あり

又此洋服を着したるハ江島安之助と申し東京府民ふて父は湯屋を業とせり母は昨年肺患に罹り死せり臨終夫への遺言ふハ永く學校に通學せし先自身の吊祭の虛費を省き學資ヱ充んとを乞へりと唯一の子なれば母ハ臨終の遺言想ふべし。此生は明治十三年十月の入學ヱして十六歳なり中途二年間程退學したり人となり敏捷活潑ヱして他を統御するの才あり之をして幼年生の授業を助けしむるとあるふ案外の法を案出し授業巧みなり。其性畫を好み最も寫生及圖案を能くし校用の掛圖及び解釋の用に供する繪畫多く此生を勞す。今は教師の手本。粉本を喜ハず手本粉本を與ふれは數日澁滯して速了せぞ新圖寫生を喜ぶ。昨日も車中に在りて筑波山其他の景を寫し取れり此扇面の竹ふ鶴の畫は叔父柿沼某が暑中休前ふ扇面を與へて畫かしめ全く教師の指揮助言を與へざるものなれば之を校長より文部大臣の一覽に供したるとあり夫れを教師此扇面（二十二年佛國博覽會出品）ふ復畫せしめたるものなり

此生は本年七月圖畫科卒業を得たれハ此生に向ひては諸君ら圖畫を試みられんことを希望す。偖又玆ヱ扣へたるは吉川金造と申し即ち余ら明治十六年六月初て伊澤先生の宅に同伴して發音法の傳習を受けたる者なり此生亦横濱の者にして父の家業は家根屋なり明治十六年四月の入學にして十七歳なり。此生は怜悧敏捷にして機智に富めり此生を總領ふして今は弟妹合せて八名ありといふ。十二歳なる時誰に聞きしとあるか一日母ヱ向ひ弟共ハ年少けれとも耳が聞こへ口にて言はるゝに私は年長なれども耳は聞へぞ口言ハれず迚他人が愚弄するら殘念なり東京にハ耳を療し口を治する良醫ありと聞く私を

東京へ遣り治療を施し耳の聞へ口の云はるゝやうにして下さいと手真似にて迫りたる時は母は思はず其語は吾が胸を突く刃なりと叫ひ泣しと(是れは余か親しく母より聞たる言)。斯る言無とするも不具の子弟を有てる父母の痛心は大なるものなるに此を聞きたる時の母の懐は又更の事にして話聽きたる予さへ胸痛めたりき。然るに其前既に横濱の十全醫院「せめんず」氏の診斷にて治療しがたきとを斷念したりしに此一語に堪兼て東京大學の第一醫院に診察を乞ひしに亦同前の診斷にて愈々悲哀を極めしが同醫院の勸告により訓盲啞院に入れし由なり。去る十九年二月父の病にて初めて横濱へ呼寄せし時弟共に向ひ石盤の上に種々の問答をなせしに通せざる文字多かりしを見て御身等は耳が聞こへ口が云はるゝも文字を讀むとを知らぬとて嘲笑したりしに病める父も看病せる母も我を忘れて泣き喜ひ敎育の德を感じたりと(亦母の言)。然れども最も其父母を感動せしめたるは明治十九年六月病父へ送りたる左の手紙と同年十二月冬休に歸省の節父さん母さん只今歸りました皆さん御障りなくてよろしくあそまそ(此は歸省の前夜認めたるなり其兩親の喜は當時父母近親及ひ兄弟の連名にて長々しき謝狀と金造歸來の談話及其后母親の言にて知られ)の語なりと云ふ。實に父母は喜悦と云はんより寧ろ喫驚したりと云ふ或は然らん。

私は訓盲啞院ニ母上樣ハ來ル廿六日午前中寄宿舍へ拜見テ下サレ度候、私ハ古キ衣服差上候間御洗被下度候私ニ新シキハカマ、白メリンス白カタントキヤラコトサルマタ、(西洋下帶)トクツシタタビ、クツスミ、トクツバケ、トナ御買ヒ下サレ度候

右は明治十九年六月二十日に送りたるものなり右の手紙を見て病床に在りし父の言に十六年入學以來初めて送りたる此手紙是は金造か自から認めしものか先生から認め貰ひしものか金造の需用品買調ひ旁訓盲啞院に參りて御尋ね申せと云ひしとて直に汽車にて母親參院せり。依て訂正は拜見テノテナ削り私ニノニナノ字に改めしまでなりとて原稿を取出して見せしに感涙を催ふし品々を買與へ原稿を金造に寫させ持歸りたり。此生に就ては話すべき尚少なからざれども冗長に亘るを恐れ是に止むべし。此生は書畵に長し最も發音を得意とす。されば此生に向ひては書畵及談話を試みたまはんことを期望す。其前に此手紙をも書かしめ貴覽に供すべきか又發音にて簡單の演述をなさしむべし。

附記以下は埼玉縣敎育會及栃木縣敎育會にて生徒になせることを抄錄す

森愼一郎君　ココハ　ナント　イウ　トコロデス　カ
吉川金造　埼玉縣私立敎育會でありまそ(假名を附けしめしに私立をシタチとせり)
堀江敬愼君　來客の内に劍を帶びて居る人は何と云ふ役人でそか
吉川金造　巡査(實は警部なり此時大喝采)
堀江敬愼君　君は何年何月より小西君に就き學びましたか
吉川金造　私は明治十九年二月より小西先生から學びました
吉川金造　小西先生か演說の臺の縁に茶碗を投げ付十ッに破りました(一ッ二ッ三ッより九ッ迄終尾

にッあるを以て亦ッを付たりと知るべし（是れは余が演壇の縁より其腕を打付け破りしを見て云ひし誤なり）以上埼玉教育會

## 吉川金造演說（發音を以てす）

私共は今日初めて皆様ふ御面ふ掛りまも私ハ吉川金造と申し横濱の者であります是は高木愼之助と申し彼は江島安之助と申します私は明治十六年四月盲唖學校に入學致しまして發音は明治十九年六月初めて伊澤修二先生ゟ學びまして小西先生から習はして貰ひました。私の母ハ私の發音するを聞きて一人の子供を拾ふたと言ふて喜び泣きました實ふ私ハ嬉しくありますけれとも耳ハまだ聞くとが出來ませぬ御醫師ハ此後迚も聞くまとハならぬと申されました誠に恐しくござりますさよあら「此時聽衆皆涙を催せりと云ふ

又橡木縣師範生諸氏之を筆記し評されたるは下の如し即ち發音は一々明瞭あれとも語調の工合悪し是れ聽官の通ぜざる所にして吾人外國語を學ふにあくせんと、えんふあしすの出來ざると一様なるべし

高木愼之助算題を讀む

本日集會したる會員は總數三百五十四名なり此人々より一人に付金五錢ヅヽの辨當を分與そる時は總金高幾何（幾何ふイクッと附したり此時高木をして意味を解せしめしに總數の二字ハ兩手を廣げ會場全体を指そとを示す又辨當の二字に至り口に食物を入るゝ眞似をあして答へたり聽衆皆感ず此題の運算の法ハ吉川金造黒板に明記し會員喝采然れども此題も此生徒等の力より比ふてハ稍卑近とぞ）

江島安之助（水中の蘆邊ふ泳せる鴨）

此書は茲に掲け難し此外生徒と會員との筆談及會員の需に應じて書作多し後又懇親會に招かれ席上の書作極めて多く一興を添へたり同日樺山栃木縣知事より天野爲之氏新著萬國誌理を各生ふ恵まれ生徒等の喜び大方ならず予亦鳴謝せざるを得ざるなり

## 天保八年の女學校設立案

天保八年に女學校設立を主張した人が有ッたとハ實に驚くべき事ですが、實際その廻文を料らず得ましたから世間の方に御目ふ掛けます。

いらつめ記者

### 女學校發起之趣意

謹おもふふ。我　大御國は北極地を出ると三十度より四十二度以内ふありて。四季の氣候よくとゝのひ。地中金氣多くして。水清く甘く土硬く堅きが故より。其水土ふ孕まれ其氣候をうけて生ずる萬の物。みあ萬の國に優れり。是を以て本號を豐葦原の水穗の國と云ふ。水穗を稻穀の總名ふして。人命の本たる水穗に萬づを含ましめて。作神の名づけ給はるものあるよし。其水穗を食として生育そる人の性あれば。是亦萬づの國より優れる事。自然の道理ふて。是を大和魂大和心ともいふあり。さればこそ開闢の古へより。外國に犯されたる事あく。天津日の御繼絶せず世界に獨立して。遠き西の國の書にも傳統の帝國と稱しゐるせるを以ても。其尊きとをしるべし。ましてゑ此二百餘年。神祖の御武德によりて。四海干戈をわすれ睦みまじわり。東北のかぎりある外濱に生れし者も。

西南の極なる長崎の人ふ使れ。西北の隅なる新潟に住る女も東北の端ある熊野浦の男を夫として。萬の民己がまに〳〵業を安んし。あくまで昌平の恩澤に浴するれ。人間世の幸此上もなき有りがたき事ならずや。されど治平長くつゞく時れ。上下奢侈遊惰となることとそためしあるとにて。支那れ書にも見え昔より鴻儒の論する所あれば雀情を以て辨ぞべきふあらざれぞ。其弊男子よりも女子は尙甚し。然るにこれを論ぞる人なきれ遺憾といふべし。近頃東都町々の女の驕に超過したる事は。櫛 笄 衣服の花美れいふもさらあり。有德の者の妻妾を初め。其日暮の人の女房娘までも。髮結女に髮を結れせ湯屋の男に背をあらはせ、前垂の紐に縮緬を遣ひ。下駄の鼻緒に天鵞絨を用ふる世の中とあり。風俗殊の外いやしくなりたり。それ義太夫節新内節の女淨瑠理のふへたるふても知らるゝ事ぞかし。此女瑠淨理の族、大都會の町人の身分ふて。見物に顏を晒し。乞食非人にひとしき所業をなす事渡世とはいひあがら淺ましき仕方あり。其根本を考ふればみあ其母のあらはしにて。元來右体の所業をよき事に心得て。幼れより。其藝を仕込により。其子も亦是に倣ひてよき事と覺へ。母親ふ三味線箱を背負はせ。己がれき物を提ぞせて。親を供に連れつん〳〵として市中を徃來し。親子とも恥を恥をせざるにいたれり。是をも忍ぶべくんば孰れをか忍ぶべからざらん。又此節歌舞伎役者の化粧の仕方を眞似て。鼻と頤とをわけて白く白粉する事流行せり。是も右等れ輩より起たる事ふて。彼れ高き床の上薄暗れ處に居はりて。淨瑠理を語るあれば。見物に見えのよろしきを好み。役者の舞臺顏を眞似て化粧せし者あれは。其側にて見るときそ斑にしていやしき者なり。ぞるを素人の色くろうやせにくげなる女などれ。右の姿をよしとし眞似るれ。淸女ふ云ひし類にて見ぐるしき事ぞかし。其外女に似氣あき異なる化粧を好む族も見たれど。くだ〳〵しけれれ爰に云ぞ。元來右等の町藝妓土弓場茶屋女なぞれ。色を鬻もれあれば。髮結女に髮を結れせ。湯屋の男ふ背を洗はぞるも。尤の事なれど。是も素人ふ押移たるを。町々女髮結數多出來。湯屋の留桶鬧しくありさり。下流塞がりて濁る時れ逆して上流を濁すに至る如く。右の弊風自然と上へも及す道理にて武家ふも間々いやしき風俗の女も見れ歎かしき事あらずや扨又女の藝と云ば。琴三味線胡弓皷笛大皷踊等の遊藝知れ耻の樣に覺し。機織糸とる事れ云もさらあり。物縫事を習をさへいやしき技の樣ふ思ふ風俗となりたり。故ふ身上相應に暮す者も。幼きより娘ユ踊を習はせ。多の金錢を費して衣裳道具等をあしらへ。こゝのさらひかしこの祭なとを。親〳〵も共に浮て附添あるき。見ふ堪がたれ淨瑠理狂言なぞを其子ふ踊せ。鼻の下をのばし見物する親の存意わろりがさし。踊を習はそる時れ身のしてあしよくなるを思ふそ心得違にて。子供にいやしき風俗をしつけ。色情の導きなす仕方ふて。しろめ年とりてれ用だゝぬ。藝あり。それにつゞき皷笛大皷等是亦生涯の用にたゝず。三味線胡弓はわけて淫聲ある中にも。胡弓はいやしく非人の女大夫なぞのすべき業にて。素人の娘子供の弄ぶまじき器なり。琴もむかしれ組といふ者ばかり彈せしと聞きしに今は長唄は扨おき淨瑠理へも合せて。聞くに聞かれぬ文句を語り彈く事ふなりさるは。淺ましき事ぞろ




Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

し。第一手習の師匠と云ふ者。むかしも門弟の子供の教方嚴しかりしに。今はあまり嚴しくては子供ハ云ふに及ばず。其親々の氣にも入らさる故。師匠の方より子供の機嫌をとる樣にありたれば。子供の仕つけの爲にはならぬぞ。殊に右の技藝人等が所爲を眞似て。折々そろひの浴衣揃ひ手拭をそえさせ。社中に買りつけて遊山を催し。頭上につくりばなをさゝせ大勢をひきつれて遊行し。其弟子の多きと云れるゝを見へとしたるなど。手習師匠の所業にはあるまじき事歟。右等を以て風俗のいやしくありたるを知るべきなり。男子には師をとり身を修むる道をあらはしむれど。女としてハ學ぶ者希ある故に。女の法ある事を知らずして。右の惡風になりゆく事口惜しき次第ならずや。初に云ふ我御國の嘉穀の種なりとも其肥培の仕方あしき時は却而病害を發する事あり。人も小天地にて其母ハ地なれば。地性よく。肥培の仕方よき時ハ。善人を生じ。地性あしく肥培の仕方よからざる時は惡人を生ず。るは。天地自然の道理あり。されば神功皇后は御懷妊の御身を以て。三韓を伐ち從へ給ふ御武德備はらせ玉へばこそ。其御腹より御誕生ましませし　應神帝ハ。八幡宮と崇め奉る。我國の武威を守らせ給ふ御神とぞならせ給ひけれ。朝比奈義秀の勇は其母鞆繪御前の勇をひき。相模守時頼の賢は其母禪尼の賢を受けたるものにして。よく眞理を知るべき事なり。胎教とて婦人懷妊すれば寐るに側せず。坐するに邊らず。立つに跛せず。邪味を食せず。左道を踐まず。割正しからざれは食せず。席正しからざれば坐せず。目に惡しき色を見ず。耳にあしき聲を聞かず。口にあしき言ばを出さず。手に惡き器



をとらず。夜は正しき書を讀ミ。朝に起ては立居振舞を正しくすれば。其生るゝ子形容端正して　才德人に勝るゝ事あり是れ胎教を守るの德にて。人に性と習あればなり。武家は忠孝義勇の人を設くるをこそ願ふべけれ。然れば容より心掛のよき女を撰びて。妻とすべき事にて。物よみ手習等母の心がけたらんには。文人を出生し。長刀に太刀等を心得さらんには武人を出產する事疑なし。町人の妻とても心掛よき時は。實底に我家業を稼よき子も出產すべし。江戶子と云れるゝ者に身上持得ず不埒者の多きは。其根本母の心懸よからぬ故の事ぞかし。諸侯ハ奧へ幼年より奉公に出し。生涯宮仕させん事を願ふ人の事ハしらず。末々外々へ緣づけんとの思ふ心掛の親達ハ。其子に右等の遊藝を習はしむるは無用なる事にて。よき子孫の種を蒔かんとする田地にハ。善らぬ肥培ハ仕方なり。婦人ハ和らぎ順ひて。貞信に情ふかく。靜かなるをよしとす。女の法をしつけんと欲するには。先物讀すべし。それと支那の書をよみ覺へ。文字勝に文かくハ女に似げなき樣。源氏物語等にも見え。學問のしかたにより却て害ともあるものなれば。唯和解の女孝經女大學等の種類。其外教訓にあるべき假名交の文章、及詩歌等を手本として手習させ。其意をまめやかに說聞かする方よろし。又女子は第一行義をしつけてよし。萬づの愼み方は禮にあれば。小笠原流なりと伊勢流ありと躾方ハ習はすべし。長刀小太刀等ハ武藝を女に習はするは。當時の御治世には似氣なきやうに云ふ人もあるべけれど。武士の娘ハ云ふに及はず。町人の子にても諸侯の奧に一生宮仕させんと欲する人は　必ず稽古さすべき事なり。奧向

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は男子の勤仕する者なければ。非常の節の心掛にもなるべき事なり。扨又織縫紡績の事も。女の第一とする業なるを。いやしき事のやうに思ひて。今は縫物さへ得せぬ女のあるは。いかなる淺ましき事にや。古は　天子の御后すら。自ら織縫給ひしといふ事もきなり。たとひ家富み人多く使ひて物縫女を召つかふ身なりとも。少しも慰にも習ふべき事にて。是を覺えある時も木綿の布子を容易にきられぬといふ冥加を知り。質素を守る教にある事之。依て思ふに若女の爲に女學校と云ふものを御府内所々に取建て。女にて文字も可成によめ私ようの手跡をよく讀む者を師匠として指おき。右に申す如く女子の教訓になるべき筋の事どもを手本となして書習はせ。まめやかに道理を說示し　第一規則を嚴かにして行義を躾候樣にいたし。晝より後は毎日ろれる〳〵會日をさだめて。和歌の師躾方の師。長刀小刀の師出席して。夫々　好みの藝を敎へ。扨物縫ひ機をおり糸をとり綿をつむ事をおしふる女共を抱おきて。是亦好の事を習はせ如此法則を立て敎諭いたし候はゞ。幼き者の心は白糸の如くなれば自然とよき風にそみて惡き風にそまらず。子孫の種を蒔にはよき田地の肥培の仕方を存候に付。予も日ならず最寄に一箇所右の女學校を取立候志願にて。まず其趣意をよもの小女の親達に告げ度。婆心の一言を書しるしぬ。その仕方宜しき事に思ひ候人達も遠慮に及ばず候間。右の女學校を何れへなり取立御敎喩の事希ふ所なり。たとひひろく御府内に及ぼし。すべての風俗を化するには。いたらずとも。萬分の一にても是をなし野のよしとして。大和心に歸り咲の旭日に匂ふ花もあるべきかと。おこがましくも是を山櫻木にちりばむるものなり

天保八年丁酉冬十月

東都西久保　城山奥村熹三郎藤原增胤誌

○日本の小兒　高等師範學校附屬幼稚園の外國教師なる某夫人が此程或人に向ひ日本の小兒に評しける言なりと云ふを聞くに同幼稚園に在る小兒の一般より歡察するに一体輕佻にして事物に倦易く其玩弄物に於ける取扱方を視るに嗜好數々變更して歸着することなく一旦之を倦厭へば妄りに毀損するなど毫も意に介せず然るに古より有ふれたる日本の玩弄物の種類を吟味するに何れも前に云ふ小兒の持性に依りて造られざるものにして徒らに外面の裝飾を華美にし其脆く弱きなどを譬へて玩弄物の如しといふに至れるは教育家の嘆ずべきことなし小兒の一般輕佻なる持性が此の如き玩弄物を造り出したるか又は必竟玩弄物の脆弱なるが如く童兒を圍繞する總ての事物が此輕佻なる特性を養成したるにあるか容易に斷定し難しと雖も其相待ちて益此特性を發達せしむるは誠に見易きの事實なれば教育の任に當るものは大に注意し先づ玩弄物より改良し質素恒久の風を陶冶すべし自分も其改良方にて日頃苦心し居る所にして世間の父母に於ても此に注意ありたきことにて習慣に據るも小兒に美麗なる衣服を與へ又は屢々衣服を更へしめ其品質も薄弱なるものを使用する等は大に小兒をして倦厭の弊習を助長せしむるものなれば第一に意を留むべきなどありと嘆息して語りける由右も獨り教育家の注意を誘くのみならず父母たる者も豫め注意すべき事なるべし（朝野新聞）



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

## 小説

# をだ巻

加納雨柳齋著

### 骨牌あそび

○其一

十疊の新坐敷、一間ハ床の間、床の右を押入とし、陽ふ向て庭を前とし、床に掛た古畵の軸、探幽か雪舟か、いづれにしても古氣靄然。柱ふ夠た挿花の瓶、梅ゟ桃か、とにかく紅色艶然。床の片隅に積だ書册ハ伊勢物語と古今集です。庭は小奇麗で取込だ珍草花木もありそうですがそれはメ切た障子で見え分りません。此間の床の前に座を占て居る少年の書生、あれは美津木欽哉といふ學生でそ。年紀ハ廿三四、にくらら ぬ姿。黒綾の洋服を着て呑掛たシガレットを火鉢の隅で叩て居ますと其横に坐て居るのハ二人の束髪。これハ此家の娘です。姉の方は名をお絹とぬッて芳紀ハ十八、色ハすき透る迄に白く溫雅の中に何となく威望の分子を含で居ます。鼠縮緬の羽織、立縞の綿仙の着物、黒襦子と紫襦子との腹合の帶、これがお絹の装飾です。妹の方は名をお清といつて芳紀ハ十六といふ極の未通子、容貌ハお絹に劣りませんが其口元が少し締りのない様に見えるため品格はやゝ下ッて居ます。是は少く多辨の故か。節紬の羽織、南部の荒い縞の着物、友禪と縞繻子との腹合の帶、これがお清の装飾です。月の前に薫り床しい梅、雨の中に色をきハだッる桃の花、いづれ劣ぬ一對の好姉妹、若しかゝる花園へ浮氣な蝶でも放したなら露の宿の夢も迷ひましやう。片側ふハ近邊の女伴ゟ、でなければ女學校の朋友ゟ、同じ似合の姉妹連三四人、東西に分れ疊の端を城郭の境界とし、今ゟ歌かるたの眞最中。抑も此家ハ何處でそ。本郷春木町の時森寛治といふ〇〇省へ奉職する奏任官の住居でそ

「戀すてふ我名もまだき立ふけり」。

「人しれずこそ思ひそめしが」。

「わびぬれば今はた同じ難波ある身をつくしても逢んとぞおもふ」。

「ハイ有ました」。

「いゝえ美津木さんのもそれや戀ですよ」。

「いゝえさうぢや有ません、お絹さんのが戀です」。



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いゝえ、いゝえ。此聲が重なると美津木の手とお絹の手と組打を始めました。傍の者は勝負いかにと片唾を呑で扣て居ましたがとう／＼お絹の勝利となりました。が…不思議……今かうかるたを爭ッた途端お絹の袂から何か手紙らしい物が落ました。目敏くそれを見付た妹のお清、狼狽て懐中へ入ました。素知ぬ顔。いつそ澄し切て居ます、夕立が夏山を洗ふ樣に

これからまた五六番の勝負があつて、頓て早夕陽も烏に左樣ならを言へせて西山の閨へそろ／＼引込む時刻となりましたから集て居た武者たちも一人去り、二人歸り、今ハ皆散じてしまふと、さアお清でも、姉のお絹が部屋へ立ッて行ッゝのを幸ひ、洋燈ハ横に斜に坐りました、前後を見回はし／＼。懐中から取出す一封の玉章、更に四方を見回して更に視線が玉章へ向ひ、そして口の中で讀はじめました。池の魚が落花を啣む鹽梅、動く者は口と眼、洋燈の光線がお清の顔の半面を月夜に志ました。時々鉤上る柳の眉、可愛ゆ冷やかな眼の海へ漣が打て來ました。あら無情、花を怒らす風雨、何の風雨。戀の風、妬の雨。頓て卷納た戀ハをだ卷。其卷納る時お清はいつか目になみだ……

「金欠よりお絹さま……はてなそんなら妾の先に姉さんがもう文を……それでは此間美津木さんが忘て行た洋本の中へ挾んで返した妾の文は……だめ……だめ……だけれどあんまりお美津木さん……人をば……ばかにしさ」。

と獨言して居るうちに何か心に浮だ感覺、

「ようございますとも妾はどうせこんなお多福です。なに今お母さんに……お母さんに」。

此時奥の間で母の聲として、

「お清」。

〇其二　ぬれ衣

これお絹、お前只だ黙てばかり居ちやア分らないぢやや有ませんか。そして此方にハ是といふ確固な証據があつて言ふのです。いつも妾が義理ある母だからとおそッて扣目にして居れば……然しこんな事は他の事と違ひますから妾ハ決して許しません」。

これはお絹の繼母お安(お清の實母)がお絹をいぢめる言辭です。なんの爲にむごたらしく、いぢわるさう、つらにくさう

にいぢめるのでしやう。則ちこれも戀の濡衣を根にして義理の愛にかこつけお絹をいぢめるのです。お絹は身にふりかゝる濡衣の干すべさへも涙です。ほんのりと其色を上つた紅の臉。

「それやお母さんどんなに仰ッてゐ妾はそんな事は知りませんい、ゑゝお母さんとした事がなんぼ妾が……妾だつてそんな猥褻な事が」……

口早に答ました。突然と發した繼母の意外な質問にはお絹も驚ました。その驚いた原因、お絹は生平から貞淑の質で假にも夢にもなまめいた事とてはなく、或時は敷島の道を樂しんで三十一文字に我がおもひを述べ、或時は挿花茶道を好んで風流に我が心を寄せて居るばかりです。それだのに今繼母が發して意外の質問とは何でしやう。お清が拾た戀のをふ卷。それを己の戀の出來損ひの恨みから繼母に見せたのです。お安はまさかとは思ひました。が、お絹も年頃。平生美津木がお絹に意のある樣な素振り。それを見れば疑問も流石に起りました。

「それぢやお前この手紙を御覽な、それは覽おぼえがあるだらう」。



投出した一封の玉章、お絹は見も知らぬ手紙。不思議さうに取上て見れば自分の宛名が顯然と書て有ります。はッと驚ました。其驚いたお絹の顏の直面へお安の逆釣た眼がぬッたり向ひました。お安の聲の三味線の糸が同時に切れて、一ばかりの太た荒い調子。

「大概になしなさい。もしもそんな猥褻な事でもあつた日にや此妾が前の實母さんへ對して濟まない。美津木さんの其手紙で見るとお前から先に美津木さんの方へ何か言ッて上たやうだ。そして此手紙はその返事らしい」。

お絹は塵ほども覺はありません。が、今玉章の文意を見ればお絹が寄せた返事らしくなまめいた事が書てあり、末尾の宛名にはお絹さま金欠よりとある、その金欠の二字を合せば美津木の名となりませう。身に覺の無い濡れ衣。實にお絹も驚きました。それ驚たが、どうして此手紙が、との驚きと繼母が間違ました。けれどお絹はもとより淑貞の性。

「どんなにお母さんが仰つても他の事と違ひこんな事は露聊も覺がありません」。

とばかり風に靡く柳。たゞ左とやらにして居ませう。繼母のお安はいらだちました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「それぢやようござんす。妾だつてこんなに確固な證據をあげて言ッて居るにまだ強情をおはりなら」。

これが打留の落雷。つと座を立て奥の間へ這入ッて仕舞ました。跡にお絹は悄然と袂の先を口にくはへて疊の目を俯向て讀で居て、そして一つぽろり。此時後の襖を五分程あけて玉蛾の半面を見せるのは妹のお清。お絹は雨に沈だ花の顏を重そうに上る途端ふいとお清を見付けました。しかしそれと同時襖はぴッしやり。柱時計の音が跡できち〳〵と怒ッて居るばかりです。

看客に御紹介申します、今度から此小説をも載ます。此回に限り小生は小説を拔きましたが、次號にはやはり揃ッて出します。加納氏は小説熱心の人、なにとぞ此上とも御目掛けられて下さいませ。　美妙齋

## 寄書

如何にして女子を教育すへきか　静岡　竹嬢

抑も一家を幸福に致し候は女子の天より命せられたる義務に有之候。女子が一家の幸福を作り出し候は全く其天賦の淑德に因るものにて智育のみにては決して作り得べきものには御座なく候。然るに當時の女學校は智育にのみ偏し德育及家政を度外視するの傾あるは誰れ人も疑はざる事にて特に私立女學校の如きは其弊最も甚しきかと存候（耶蘇の學校の外は）。世の教育の任に當らるゝ方々は德育は智育より得らるゝ者と思召候やハタ德育は婦女には必要なきものと思召候や育兒裁縫料理洗濯看病は女子固有の職務にあらずと思召候や。嬢は皆樣の否々悉く必要なりと仰せられ候半と存候。然れば何故に教育の方針を此点に向け給はざるや疑はしき事に御座候。

裁縫料理は下女の役目なり看病育兒は學ばずとも自得すへし又若し差支あれば看病婦を雇ふべし乳母を傭ふべしと思ふは當時學藝に從事せらるゝ淑女の空想に有之候て焦眉の急は未來の良人定め流行の奴たるに有之候。是れ固より空想に候得ば一度妻となるの曉には來客あれば料理は料理屋に命し三度の食事は下女に委せ裁縫は仕立屋に打委せ廢物利用等の事は絶てなく少しくヒキメ立たる衣類は忽ち下女晴衣の材料と相成口に經濟の原理を唱へながら身に之を行ふ能はず「時は是れ金なり」その金言は知も遊惰は身を亡すの鬼たるを知

らず。　おん身等なぞ白面の女生徒に候ぞや。　斯る生活は華族勅任官豪商には差當り差閊なきにいたせ中等以下には嚴禁の生計法に有之候。

右は唯一家の衰頽を來すのみに候得共茲にいとも憂ふべく悲むべき事は初子を殺して育兒法を知る事に御座候。　鶯の如く我天賦の義務を放擲して乳母に專任せ候得ば兎も角も自から保育の任を取れば此子は無慘にもヤブ母の草紙となり幸に迷途の旅につかすとも怯弱の人間と相成候は疑ひもなき事に御坐候。

教育家たる方々父たる母たる方々に申さん洋語はナンの効能有之候哉幾何代數はナンの効能有之候哉。　否貴重なる女子に缺くべからざる家政と德育とを措て學ばしむるほどの効能之有候哉。

世の女學校長たる方々。　諸君が教育家としての地位は我文明の母たるべき淑女の其母に候はずや。　教育家の職は只生徒の智識を増すを以て盡せりとせず其前途をそ心配すべきは今更申までもなき事に候。　然るに生徒たるものゝ將來の利益には頓着せず徒に時好に投して教科を設け私利を博するに汲々たるは生徒に對して不親切なるのみならず方々の地位に對して愧づる所に候はずや。　父兄の信任を無にし社會に對する責任を履み玉はさるにあらずや。



世の父兄慈母の方々。　世の風潮に誘はれ給ふな。　世の中に德育なき物知りほど恐ろしき者はなし。　鬼神お松高橋お傳等名たゝる奸婦は皆德育なき物知りに候はずや。　不品行は爲放題僞言は吐き放題。　其上に白面束髮の女生徒は論語よみの論語知らずにて實地の應用は知らず。　氣高きのみがせめての取所。　よし西洋人ほど自由に洋語が達者なればいろに幾何代數が達者なればとて其の用ひ處は教員か只しは通辨。　役目は是ればかり。　教員通辯の需要には限もあり且是等の人物を養成いたす爲め女子師範學校の設有之高等女學校も幾分哉此性質を帶ひ候ものかと被存候。　數多き私立學校の生徒の目的は何の点に有之哉。　善良の妻となり母となると其唯一の目的に御座候。　然らば德育育兒裁縫料理は英語算術より先になすべきは申すまでもなきことに候。

孃は決して英語數學は無益とは申さず唯無益と申さゞるのみかお學びあそばせとお勸申すなり。　が學び方が違ひ德育家政を主とし之等の學問は二段と致すとに御座候。　此順序を踏みて尚御餘力あらば音樂も歌俳諧其他文藝技術なにくれ

となく身分の許を限り意の欲する丈お學びなさるとは固より願はしき事ニ候。

最後に父兄諸君ニ申上げん方々の娘子達ハいづれも品行は方正の方々に候はん。　が都下へ遊學ニ御遣しに相成候時ハ其品行を破らしめんとするアクマハ到處ニ徘徊いたし居候。

女朋輩の害は重ねて申さずとも第一回で御承知ならん。

次ニ男子の害ハ女學校の比隣には男子の學校又は男子の下宿屋有之候。　是等男子生徒の中ニは野心を抱き居る輩澤山にて。　折もあらばとねらひ居る者儘有之候。　況して男女交際と稱してまだ血氣の定まらざる年少の男女相提携致候とは餘所の見る目ニもあなやと危ぶみ申候。　よし間違のなきに致せ双方勉强の妨と相成候。　されば田舎より都下ニ出して喃れ躾け給はんとなればまづ確實なる監督者を得て後之とに限り候。　若し思はしき監督者なければ出さゞるにしかず。　學問に長して不品行なる女よりは學問も通例なるも淑德ありて家政に通じたる淑女こそ望ましけれ。



## 枕草紙まなびがきに就て

いらつめ第十九號文藝美術欄内に枕の草紙まなびがきといふものを載せられ枕草紙の中之一節を抜き出して之に俗譯を下されましたが其中に少しく不審ニ思ハるゝ節がありますから左に記して御伺ひ申上げます

「中々晝よりも顯証に見えてまばゆけれどねんじて見なとす」とあるを「却て晝よりはつきり見えて居るくせにそれで念じてわざ〳〵めかして繪を見なとそ」と譯してありましたが此譯ハ如何でございませうか又ねんじての譯をやはり念じてとつけてはわかりますまいと思ひます「却て晝よりもハつきりと見ゐて何となく耻かしけれどもこらへて其繪を見なとして居りまそ」とでもしたらば如何でせう

「いかですぢかひでも御らんせんとてふしたれば御かうしも參らず」の譯を「どうかして偷んでも見たいと臥て仕まう故御格子も開けず」としてハ誰が見たいと思ふのかわかりませんそれも「正しく向ッてではないけれども我身を宮ニ御覧せらるゝのが耻しいので　どうかして御覧せられまいとそこにうつふしたれば御格子も開けぬ」などしてハ如何かゞ

又おほせとあるべき所を二ヶ所ともおおせやありましたが是はやはりおほせの方かと思ハれますそれとも何か說のあるとでございまそか

右失禮ではございますが いらつめ方の中には私と同感の人もありはすまいかと存じて一寸申上げましたのでございますからどうぞあしからず思しめし下さい

一月廿一日　　雪の舍

いらつめ記者御中



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御訂正ありがたく存じます。如何にも記者の譯ではまだわからぬと云ふ方もありましよ。「おふせ」ハ御說のとほり誤植でした。猶文藝美術欄にはその他の誤植もありました。多罪。　　いらつめ記者

秋田訛に就て

拜呈私此頃いらつめ第十九號秋田言語の差異を載せられたるを見るに非常に誤れる事實なるを發見せり即ち

第一　烟草一吹お吸ひなさいといふを一吹ふきならせといふとあり佐久間舜一郎氏ハ如何に聞きあやまりよるにやふきならせなどといふ言語は當秋田には曾てなし其證據には一吹お吸ひなさいといふ處には一吹おぎやいといふあり是は一吹おがり召されといふ意味なり

第二　マー御はいりといふ處へあべしやーといふとあり是も亦佐久間氏の臆測に過ぎずあべえやといふ言語は當地商家婦女子の言にして中等以上ハ如此言語を使ふ者なし其意味ハ御はいりなさいといふことにあらずあべしやとは途中などにて伴の人が遲れたり又ハ人を呼ぶに行きて其來ると遲きときハ早く來れと促す言葉なり私ハ未た曾ておはいりなさいといふ處をあべしやといふものあるを聞らず否斷じてなし商家婦女子は早く來れといふ處を早くあべしやといひ又通常の人は早くあべでやといふなり但同位の人に對する時のみ御はいりなさいといふ處にはあかりみしやいといふか或はをを略してあがミしやといふ尤も此言葉も婦女子ハ多く使ふなり

第三　男子女子を合稱してわらしといふなり敢て男子にのみ限らず兩性通有にして child 又は children の意味なり但し Children のときはわらしがだといふめらしとは女子をいふなれども若き下女を意味するものにて女子一般之通稱でなし



さて乘も茄子も當地にては同一之言ひ方なれども是ハ Accent を以て區別し居るなり即左の如し

Nasu＝乘　是ハ一寸御參考まで御一笑被下度候
Na'su＝茄子

又同處にて馬に乘るに行く又酒を飲むに行くも秋田にていふとて載せられたし定めし此ハ馬に乘りに行く又酒を飲みに行くの間違なりとの言葉なるべし此に一ツ記者先生の御教示を得度事あり夫ハ此の飲みに行くと飲むに行くとの二ツに就てハ昨年當秋田にて頗る騷がしかりし問題に有之て當地中學師範兩校に各一名之古典講習科出身の人あり此人曰く accent

人を呼ぶに來らす(甲)
人を呼びに行く　(乙)

甲例にてハブよりにあるてにをはを受くる事を得れども乙例にてはビより受けさるを得ずと唯例のみを擧けて其道理を言ハず遂に此問題は夫きりにて止みたりしが幸ひに「いらつめ」に此事出たれば敢て其乙例にて何故ブよりハにと受る事能ハざるやの理は說明あらんことを奉希候　秋田　H. N.

記者申す。御質問のおもむき如何にも甲例に於てハ「ブ」から「ニ」に接しますが乙例に於ては「ビ」から「ニ」に接することか出來ます。その子細ハ別に込入ッたことでも有りません。たゞ、しかし、秋田邊で「人を呼びに行く」といふべきところを「人を呼ぶに行く」とい

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に、これは果してたしかな出處が有る語法かまたは轉訛のあやまりか、その處をまづ決めなければなりません。　が、甲の例の「ニ」と乙の例の「ニ」とハ互に違ッた意味を有つて居るのです。　すべてこのやうに用ゐられる「ニ」には二種の意味が有つてその一は即ち逆語でまたその一は順語です。　逆語ハ方に接する動詞は必ず宇横行ハ語尾を取り、また順語の方に接する動詞は必ず語根のまゝであるものです。これハむかしから變ハらぬ体です。　たとへば、「ゆくにもかれず」、「あすにてされぬ」などのとほり、その意味ハ「ゆらんとすれども行かれず」、「てさうとすれどもてされぬ」といふ處で、即ちあの處の「ニ」は前から來た意味を逆に轉ずるのです。　おろし後の例ではさうで有りません。　あの方ハ「ニ」ハ大抵「ベク」の意ですから「呼びに行く」もつまり「呼ぶべく行く」などの意味で「見にけるかな」などゝつゞくそれと同じ理です。　それを秋田またはその他の地方で「呼びに行く」といふかはりに「呼ぶに行く」と用ゐるのは、それ故、順語と逆語と混淆した次第ゆゑわるいのです。　理といふのは即ちあれです。「逆語に接するの動詞は必ず宇横行の語尾にあり、また順語に接するのは必ず語根のまゝにある」、あれは日本語の元則です。

きたない服をした女の兒がさもほしさうに菓子店を覗ひて立てゐるから通り懸った婦人が「お菓子を買って上げやうか？」と申しましたれば女の兒が「ホント？」「買って上げるとも夫でハ大きいのを一つ買ふか小いのを二つ買て上げやうか？」「叔母さん小くてもいゝから二つ買っておくれ頂て歸って弟にもやりますから」



# 批評

## いさり火

大和田建樹氏作、中央堂發兌。

かねてから詩人の春や明治唱歌に於て色々の妄評を挾みましたのも皆あのポエトリイを隆盛にしやうと思ふ記者の老婆心で、今この道に志すものゝ少ない世の中、ひとり大和田氏の倦まず力尭られるのは實に有難いことで行末ハ評者も詩壇に於ていくらかは交際を願はうとさへ思ひ、そこで今まづ思付いた處だけを述べて「腹のふくれるのを」療しましやう。

第一に譯者がうれしく思ふことは抽象的ハものを材料とすることが大和田氏の今度の作に於てやゝ多くあッたとです。たゞ具体的の材料の外面をのみ述べて居たのが在來の歌道の一の弊で兎に角今度のいさり火にそれがやゝ少なくなッたのは喜ばしいことです。　が、その喜ばしいと思ふと同時にひどく殘念と感じたことが有ります。　即ち、斬新の句の少ない事とその哲學上の考が高くないこと、あの二点です。

「をとめの望」から「別れしあと」に至るまでの五種は、更に價値の無いものです。　次の「わかみどり」、すなはち、

たが琴のしらべがまじる、　わか緑おほふあかげを<br>
はしりくる水もあつかし。　花つみにあひし少女の<br>
面影は今もみゆるを　まぼろしに今も浮ぶを（下略）

この五六句の着目も中々妙です。　が、惜い事には句がきびしく行きませんでした。

次に「海邊の歌」、これは今一段の御鍛錬を願ひます。

次に「なでしこ」、優美な作です。　しかし、「をとめ」といふ言葉を二度までくりかへされたのは如何でしやう。　初句の「をとめて」はまづ必要の言葉でも有りません。　第三句「しらつゆをなみだと受けて」の「しら露」は「あさつゆ」と爲ッた方がよささうです。　第三句と第六句とに「なみだ」を二度出されたのも些と變です。

次に「ほたるぐさ」、これは傑作です。　句法のとゝのひと言ひ、意匠の妙といひ、ほとんど隙間は有りません。　たゞ第三句「たにがはのくさばらくれよ」とある「谷川」は如何でしやう。　筆では一寸言へませんが、此處でも「谷」といふ言葉は用ゐたくありません。　御勘考を願ひます。

次に「瀧」、これも第二首を除けばその餘はいづれも佳作です。　第一首の第五句「あかばより谷はたゝれて」、及び第三首の第五及び六句「はやりゆく手にもさはらであめつちの板にぞ合はす」これらは秀句です。　しかし　第一首の第六句「ふかみどり」云々は第五句「あかばより」を受けるには弱過ぎます。　あれが疑です。

次に「あぢりの花」これは句法の一寸面白いだけに意がよく有りません。

次に「秋のかたみ」、中々綺麗です。　「消えぬまにあられをのせて」とは妙です。　併し氣韵の乏しいのは如何でしやう。

次に「夕雲」、骨は折れて居る作ですが、よくありません。

次に「あられ」、この最後の歌、「まつの下葉（したば）をいのちにて」云々は凡作でありません。が、以つこの胸にねふるらん」は奇を好過ぎた句です。　むしろ此處は輕く「のこるらん」とでもした方がよささうです。

「少女の死」などは之をミルトンのリシダスに比べれば如何でしやう。　で無ければ幼兒の死んだ時の場にくらべて如何でしやう。　むしろ渠を掩ふほどの功が奏せぬほどならばこの類は作らぬ方がよささうです。

さて終尾は「冬の月」、中々おもしろい作です。　ことづけはすこし精密に評して見ましやう。　就ても全句を引くかも知れぬ、それだけは御海容を願ひます。

第一首、初句及び第二句、いづれもよく整ッて居ます。　第三句及び第四句、「つねにかはらぬ影あれど　世界はいつか老いにけり」、この二句いづれもちと言葉の節儉が届いて居ぬやうです。　なぜと言へば初句及び第二句で「つねにかはらぬ影」の意味は既に大方出て居ます。　それゆゑ第三句ではその意味を楔子として受けて轉ずるからには何も第三句の全句を事々しくひとつ意味で埋めてしまふには及びません。前句を受けるだけの意味を第三句のはじめの七であらはし、次の五では結句の地とつくるのが上手段です。　この歌ではこの手段が用ゐて無い、それゆゑ意は面白くても轉結の二句の力が有りません。

第二首　やさしい趣向です。　しかし初句、「しろたへひろき園のうち」、これ「ひろき」は面白みないやうです。　しかし何と言ふ言葉を代へていゝか、それは思付けませんが兎に角　「あまねき」とか言ふ方がよささうです。「ひろき」では何となく打付に聞えます。　第五及び第六句、「あふるゝ



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

戀をうつといふ少女の歌もきゝつるに」、この「あふるゝ」は洋語の直譯です。外に消化したものに願ひたうムいます。「うつたふる」は語があらうでございます。しかし、意匠、ことに初句及び第二句の意匠は中々妙です。「いづこにかげを休らへん」とはよく言はれました。

第三首、「ゆふべの窓にのぞみのこす」、この「ゆふべ」は何の益にも立ちません。

第四首　「ひそり時めくともし火の　ねやもるひかり細りゆく」、この「ときめく」と「ほそりゆく」と變に相犯して居ます（過去現在の相違は暗に見えて居るその、）

第五首、氣韻は有りませんが　味は絶妙です。

第六首、一おちばにうづむかけはしを　あらしとふたりうちわたる」、實にはめても褒足らぬ秀句です。

第七首　歴巻と言ッてもはつかしくない作　「なみにうたれてくだけても　うらみも敵も知らぬ身は　ひかりしづかにわらふのみ。　くまなきうみよ、わが舞臺。　いかれる海よ、わが旅路（かひぢ）」とは實に詩人中の詩人の口吻です。

その他　春夏秋冬の雜詠はいづれも面白く拜見しました。

唱歌の方には高尚熾大といふ意氣込が缺けて居るやうに思はるのは、評者の見損ひかは知りませんが、まづ難でしやう。その他きざみ過ぎた處が有るやうですが、しかし評者はきざみ過ぎても構わぬと申します。今の内さん〲御刻みあそれば爲さるほど筆の老いた曉の活氣が出ます。ある種類の歌人に大和田氏の作を評させたら「そら〱と詠む」とその原則に觸れたとて叱りもしましやうが、しかしそら〱と詠まうと力める極、花も綾も無いものをつくり出すのに比べれば智者を待たずして相違は見えるわけです。新日本の詩壇に於て望を屬すべき大和田氏、決して阿諛ではありませんが、折角の御才氣また折角の御熱心、これ後とも御經營を餘處ながら願ひます。評者をして勝手に評せしめれば　大和田氏にはテニズンの混雜は一寸見えて居てもミルトンの雄大は見えません。混雜、それが一歩をあやまれば柔弱となります。間々混雜に於て評判を取つたブルームフヒールドも全然の詩人とは誰が言ひましやう。着目が人の目に多く觸れぬ微細の處に入るのは詩歌美術の大禁物です。大和田氏の作に於ていさゝかその邊を犯した處もあるやうですが、さて如何なものでしやう。

箏某の盤

男爵高崎正風君歌、上眞行氏曲、中央堂發兌。歌の譜のみで無く、樂器の手までついた物、段々かういふ類が出來るのは何よりのたのしみです。

## 蝴蝶

不知庵主人

蝴蝶を評せよとお望がありましたが、拔群の趣向、出色の文字。看板に僞なく、精一杯の作と偲ふ見へますが、敵に背を見するも卑怯。お望が有て筆を投るも何とやら……。そこで書て見ましたが、是でも批評の積です。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一夜漬——却て風味があるやうです、即席料理——寧ろ庖丁の手際が見へます。が、是は一と口の味です。嚙占て見ると一夜漬は矢張り一夜漬、卽席料理はどうしても卽席料理。太牢の滋味八珍の饗膳と同様には參りません。それを僅に語格の相違を咎め、挿畫の目新しきを毀るは、まだ小説の眞味を知らないのです。思出す、信長の昔咄。解らぬものには鹽辛き田舍料理が相應でせう。かくいふ主人も其お仲間。ですが田舍者は田舍者だけに氣の附いたこともありません。いふ迄もなく美妙氏の得意は時代物。武藏野といひ蝴蝶と云ひ、類と異似のない一流專賣の作です。時代言葉の好み古實の調。平凡作者には出來ぬ處で、二小説共に作者の苦心したのは實に爰にあります（勿論趣向も中々深いが）。シカシ苦心した甲斐はありません。言葉をその時代のまゝにした處で、果して文章の美妙を增しませうが。ドウモ疑はしい、否ェ增す事はありますまい。シエーキスピーヤは希臘羅馬を種としました、スコットは中古シバルリーを好んで描きました、又昔の英國も材料となりました。が希語羅甸は勿論テユートンやサクソンの言葉も數四の名詞の外は用ひられませんかッた。ケレド、いふもおろか、文字の美妙なる事は爭はれません。偶々ミルトンが博識を慢らうとて羅甸を使ひました。が、マコーレーの云つた通り、到底古言を話す事は出來ません。ミルトンの宏才を以てすらかく評されました。蝴蝶や武藏野は詞ばかり時代で、ミルトンとはチト相違しますが。ろくてはストーブにて釜を煖め、椅子に腰掛けて薄茶を飮む感があります。尤も「ヨカ」言葉や「ダンペイ」訛と違へば、強ち「美」を損じもしませんが。損じぬ丈で增す事もなりますまい。「美」を增をなければ作者の苦心は水——充分察しますが賛光るわけには參りません。ジョンソン氏の言葉を假りて云へば「賛光るべきは唯摸倣のみ」です。殘念、若し此苦心を想像に向けましたら蝴蝶及武藏野は更に一層の好評を博したでせうに。古實は是と變りて文字に關係なければ、時代小説には充分調べたいものです。サスガ美妙氏、少しも拔目は見へませんが、なせ誰も知る僞書を種としましふ。馬琴曰く、スコット曰く、それは兎ニ角、作者美妙氏嘗て主人に向ひて日本國作者の僞傳を附會して後人を惑はをを歎せられしに、しらぐしくも「中々容易ならぬ」などゝサモ仔細ありげに………。何故でそ、俗物を驚かす積りですか、後人を惑はす爲ですか。兎もあれ辭藻脚色は巧妙精緻です。が、主人が素人考を云ふと、第一餘韵がありません。作者は詩人——シカモ花に鳴く鶯水に栖む蛙と仝格の詩人ではありません。それだのに不思議、文字に餘韵を含まぬとは。例に出そも古めかしいが、「香爐峯の雪は」、是で御簾は揭りました。「風寒し」といへば「障子建よ」は日はずもがな。理屈ばかりでも解りますまい。例を出しませう。

運わるく足が滑りました。滑りました、眞逆さま………

蝴蝶の顏のその凄さ（あゝ殺した）

殊に助働詞の使用繁に過ぎ。急劇の文字も緩漫となり、奔流の勢も停滯の姿が見へます。別に引証はしませんが、味て見ると此感が浮びます。是は美妙氏の言文一致の弊です。蝴蝶——腦漿をしぼッて錦繡の才を顯はされたる此蝴蝶も、猶は其

通弊を脱しません。けれど全体に云へば文字は宏麗典雅、あるは雄渾徴勁、毫末も遺憾はありません。が、善き上にもなほよかれと思ふてまそ敬愛の心を盡すと云ふのです（學海先生の眞似）。美妙齋と云ふ賣出しの文學者、爪の垢ほどの傷も大切です。圓満具足は誰人も願ひます。試に一二を擧げませう。一回に「跡は鼻をすゝる者が聞へるばかり」、是では手習子のだゞ泣の如くして可笑。全じ事でも「鼻をかむ音」とせば穩かならんかと思はる。三回に「夜半」とあるは「殘月」と矛盾する様です。「御覽なさい、噛まれて居る亂髪の末一二本」の御覽なさいは注意の間投詞でせうが、前段に比するとぞつと力がなさすぎます。全じくは「御覽じろ」としたし、是とて有力でもないが。「里人たちは素氣もなく」とあるは蝴蝶の詞「いなく必ずうろたへ給ひぞ」と矛盾した様ですが、左様でもありませんか。まだ他にもありますが、不妥と思ふだけ。そんなら斯うという考は……。近松巢林子が「鬼もわん〱泣くばかり」と云ふ句、わん〱は犬の様だと評した處で、さて代りになる妙文句もありません。次に脚色です。誰か不平を云ひませう、絶妙絶奇と贊むる詞に。二節春風殪るゝの曉若宮かくれ給ふの一段に到つては、出雲馬琴の著にも見へぬ好案！――評者も覺へず机を柏きました。が、若し一歩を進め、四回に尼法師の代りに旅客或は郷人を描出して是に蝴蝶の末路（自殺）を語らしめば、讀者は更に一層の斷腸を覺ゆるでせう。「うきくもる」の歌、有て全篇を振ふに足りません、無くて文体を損じもしません。插畫にあれば淨山でも（當時の流行ですか賣出しの景物であまり感心しません、土臺となつた經房の歌でも二ヶ處までは）。口善惡なき主人の友曰く、美妙氏の特異は古歌の引證と發矢といふ間投詞なりと。古歌は引証も結構ですが、規則の様になると京童はリットンにかぶれたんだと忽ち申します。發矢とは珍らしき間投詞、有力ある間投詞、はッし、嶄新なる間投詞でも。さて終るに臨み一言――大音に申さん。美妙氏の筆は縱横自在、其自在なるに任せて富贍ある想像を描きます故大抵の讀者は眩惑します。が、此處です。美妙氏の想像は「自然」にありませぬ、即ち詩人の想像です。月のさやけさ―夜の凄さ、寧ろ小説家の本務ではありません。噫、一長一短、「自然」を寫すに巧妙ある筆は檀浦つゞきの磯邊を描くべけれど、山里の草のやを畫くに疎……蒲の席矢根の釘未だ物足らぬ心地ぞする。小説に重んずべきは、自然よりは却て人爲を描寫するにあります。是ばかりか縱横ある筆は殆んど四季を混じさる様です。秋冬は「咲いて居る淋しさ」春夏は「笑つて居る淋しさ」とありますが「殘酷ある羽音を響せて血に乾いた咽喉を鳴らそ梟」云々の句は武藏野の一節より脱化したると覺しく春秋の區別が見へません。些細な瑕瑾でもが是は注意すべき點と思はれます。

近頃比類なき傑作、國民之友三小説の中に嶄然として屹立して居ます。が、脚色と云ひ文字と云ひ凡て是れ詩。若し少しく改竄を加へてエピック、ポーエットリーとせは更に一層を進めませう。「ぬれごろも」のお手際では小説作者、蝴蝶（武藏野も）此御趣向では、實に新日本の大詩人。カリダサは印度のシエーキスピーヤと稱せられましたが。知らず、日本の

シエーキスピーヤは果して美妙齋氏なるか。主人は頗る多忙（噓でハありません）。夫故一ケ月前からッイのびく／＼に流れた報は忽ち一夜作となりました。精一杯の作を草卒に評するは生意氣ですが　是はおゆるしを願ひます　蝴蝶や武藏野ハ夕にきゆる蜻蛉小説ではありません。デスから主人ハなほ文學研究の上、今より十年後（氣の長い咄）にハ更に細評を加へませう。先は是れにて　御免を願ふ。サラバ……

## 通信問答

かと子さまへ　枳殼も硼砂も藥種屋にあります。

高橋ふか女史へ　（一）お尋の物はまづ金港堂出版の家政讀本です。（二）風を引かぬやうにするのも冷水浴がよろしいのです。冷水浴が御面倒ならば晴れた日に手拭を清水に浸し、かろく絞つて首のまはりを拭き。五分ほど經て取去り、その跡を乾いた布でよく赤くなるまで摩る、この法をよくつゞけて行へばよほど風は防げます。もッとも是はあたゝかい時からはじめる方がよく、また日のあたる處でするのがいゝのです。その他日向で身をあたゝめ、急に冷な部屋などに行くのも風を引く第一の原因となります。（三）それは記者にはよくわかりません。（四）祝賀の時松竹梅を飾るのは終に疑問として置きました。

謙音女さまへ　棗を薄く煎じて用ひるのも聲を清くする効が有ります。

花川操令娘へ　（一）髮の毛のちゞれたのを直すには麻の葉と桑の葉とを等分に煎じつめ、常にそれで洗ふのが一番手輕な法です。（二）黒子は開業醫に拔いて御貰ひになる方がよろしいです。

皆山女史へ　（一）手の色を白く滑にするその法ハいらつめ第十二號に出て居ましたが、十二號は賣切に爲つて居ますから茲に更に掲載しましやう。微温湯の中で最上の石鹼（ペーアスの石鹼、コルゲート商會のグリスリン石鹼、及びチエリー、ブロッソムなどが宜しいのです）を用ゐて丁寧に手を洗ひ、洗了れば乾いた手拭いでつよく拭ひ、血の循環をよくするのが第一の法です。この法を行ッて居る内、更に左の藥をあはせて用ゐれば成効ももッとも早うございます。卽ち、巴旦杏二オンス、白蠟三ドラクマ、鯨頭油三ドラクマ、右の三品を薔薇水で煉交せ、よる臥す時手へ塗り、あくる朝洗落すのです。たゞし塗つた上に手袋を掛けおけばなほ



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ません。手袋をかけて臥そのは心持がよくありませんが仕方が有りません。猶その外一二種色を白くする法もあります。やがて後のいらつめに出しませう。（二）歯の色の黄色なのを治す法はいらつめ第十六號にあります（三）髪毛を保存する法は いらつめ第十三號にあります。（四）毛を延ばす法はいらつめ第十四號にあります（五）身体の肥滿する法、それは直に成効を見せる手段も有りませんが、たゞ食物を節し、運動をよくし、そして皮膚を清潔にするのが一番の法です。

信濃上田某女史へ（一）眉を自由の形にする法は出來ません（二）記臆をよくする法、それは薩摩國揖宿病院長西牟田氏が秘傳として敎へます。郵劵二錢を西牟田氏へ投ぜれば規則が來ます。（三）上戸を下戸にするには截れ竹の切株にある露をとり、之を食物の飲物の中へ交せて一週間ほどその上戸の人に飲ませるのがいゝとある書に見えましたが、眞僞はまだわかりません。

小池しん子さまへ　お尋ねの趣、羽織は十七八歳の令孃には目今のところ藍鼠のすこし淡色がゝつた方が宜しうございます。　さうすれば表着の紋付の色合はやはり鼠小紋でそが、小紋は中どほりの處、卽ちあまり細過ぎず、また疎過ぎぬ處が至極です。　さてこの紋付と羽織につりあはせるには帶は黄がまたは樺の方へすこし傾いた繻珍に限ります（もッとも丸帶）。　しかし令孃の身の丈、これが勘定に入れなければなりません。　もし常より大きいお方なら藍鼠は濃い方が宜しいのです。

眼のやさまへ（一）それは信濃上田某女史へこたへた處をご覧なさい。（二）視力を强くするには目を遠視に慣らすのが一番です。　山の中や海の邊ではるかの處を見て目を馴らすのが第一です。　次には烟りに逢はぬやうにする事、烟はすべて目に大毒です。　次には强い光線にはなるべくあはぬ事、電氣燈、瓦斯燈、ランプ、大陽、日向で物を見る事、これらをも避けなければなりません。　是非このやうな强い光線にあふ時には棕色のガラスの眼鏡をお用ひなさい。　砂ほこり或は雪中の旅行などの時にはことさら。

つぼすみれさまへ　おとし頃では黒縮緬の羽織と鼠小紋の上着をお着用になるのが一番人品がよろしいです。

佐野玉子さまへ　白髪を黒くする法より外は之を未發に防ぐといふ事はむつかしうムいます。　毛を大切にすれば格

別、病身の人や心勞する人は大抵早く白髮になります。白髮を黑くするには黑大豆を酢で煎じてそれを鬢水に用ゐるのがいゝといふ事です。その他石榴の皮を煎じて鬢水に用ゐても同樣のきゝめは有るとの事です。

琴水史女へ　（一）鹽酸アンモニアで宜しうムいます。（二）硼酸と硼砂とは無論ちがひます。

松山史女へ　（一）首筋の生毛の濃いのを薄くするには生石灰二オンス、アルセム（藥草）二オンス、及び巴旦杏の粉、この三味で煉油でこしらへるのです、巴旦粉は合劑が塗きるだけ柔い加減に見計らッて入れてよいのです、あまり多過ぎると油が硬過ぎます。さて毛を薄くしやうと思ふところの皮膚へこの合劑を手早く塗り十秒時間ほど經て直にまた拭取ッてしまふのです。長く塗ッて置くと肉がくされてしまひます。かうすると大抵毛はうすくなります。この法は首筋の毛のみでは有りません。髮へ試みても効驗があります。（二）腋臭を除くには白綠青を薄く水に溶かし、その水を塗るのが一番手輕だそうです。もつとも一度つけさへばかりて大抵根切になるとの事です。

疑問松竹梅に祝意を歸する濫觴（答者にはいらつめ一部進呈）



# 懸賞文藝

第一回懸賞文藝　題　冬の夜のまとゐ

歌の分

かたらひて　夜を　ふかすかな、うづみ火の
したの　まとゐも　かきくづし　つゝ。

右一等賞……作者竹柏園女史（トウキヤウ）

おもふどち　うちかたらへば　うづみ火も
まとゐの　くまも　あらぬ　ふゆの　よ。

右二等賞……作者高橋滿喜太郎（ハルナ）

文章の分

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば暖かき國もさもありなん夏蟲の冬を知べきやは。北國の冬はさら〳〵に眺ある者ぞ。目慣たればこそ等閑に看過して鐵の如き酷寒をのみかこちもせめ。夜來一寸の雪に墨堤のながめいかゞなど打さわぐ徒に冬は孟冬より春は仲春迄檐もうづむばかり積るさま見せたらば物狂はしくやあらぬべからん。思ひ出でぬ三年昔の事なりし妾故鄕に在る頃なりしが時は恰も一月の半ばなり、地上につもれるもはや三尺に餘りけるに、昨日より降しきる雪の繽紛として小止なく悲しげに檐端に群れ啼く雀　喜ばしげに庭躍り狂ふ狗兒は聲のみ喧ひそし。今朝となりば風さへも加りぬ。窓撲つ羽音ときゝひがめし東波の嬰

千萬の微蟲の數なり。大點小點斑らに紙を濡して今ハ殆んど殘る隈なく濕ひぬ。髪筋ばかりの隙ともいれず風向きの變る毎に吹入る玉の屑は端近く坐る下婢が頭を一時に老しめぬ。爲そこともなくて過ぐる中短き日はまさに暮れなんとす。母は婢女と厨の事忙しく、折々薪に火の得移らぞ、鑵器の指尖に粘り着くなど語らふ音す。「火燈さずや」と妾を顧みつゝ父の宣ふ。起ちて燈取りいづれば、心きゝたる弟ー七歳なりしー「姉上余が燈し參らせん」と木柿手にしつ妾を仰視たり。夕餐畢りぬ。母も坐につきぬ。妾ハ其側に坐、弟は半ハ父の膝にもたれ、いと纖小なる手もて髭拈きなどす。父は穩ろに兩眼を閉ぢ、右手をハ弟の肩にのせ、左手をばつとさし出して爐上に伸べ、掌暖めつ、又手背あぶりつしてあり。母ハ妾と弟が春服縫ハんとて針取り始めぬ。妾も例の如く助けんとて立ちぬ「父上」と弟の呼べば父は其兩眼を開きぬ。「母上め姉上も縫針をといふあるふ、余ハ爲そとれなければ父上面白き昔語りしてよとは父れ膝もりうゝ促ゑぬ。母ハ思ひ出したらんやうに妾を顧みて、「竹も（弟の名をば竹二といひし）しかいふ者を、妾とてかゝる寒き夜も慰むるすべのなくては針もえとらじ。先つ頃東京なる叔父上が年玉にとておあされし書のあるべきに、讀きかさずや」と宣ひぬ。「姉上早くし玉へ、いろで」と弟のいそしくせり立て急。「そりとて母上一人にてハ」と言ひかけしを「母は一人の方たよりよかるべきぞ、そなたが讀方のいかに巧ふ」「あら、巧なども父上が妾は巧にてハ」と言挿みしかど、聞き入れ玉はざりけん「いろに巧にありしか聞まほし、とくせぞや」と續けられぬ。「誤らば父上の正さるべきに」と母の宣ふ間ふ弟ハ早くも一卷の冊子取出て「これなるや、姉上の机の上ふありき」とて妾にわたしぬ、ヤがて讀み出でぬ。母は衣縫ひつゝ、時々は針打ち置き、燈かき上ぐる序そと爐上に手を伸ばしては又針取りつ、父は弟が双の手を更るく其掌ふはさみて暖めつ、聽きて居り。次の室ふハ下婢か身の暖まり行くまゝ夢心にて燈を拜み始むる頃なるべし。こは東京にてその頃名ある大人の、ものせられし小説にて恰も此日と同じくいたく雪降る日七つばかりの少女子が通りゐたりし路に數匹の狗兒の戯れつゝありしかば怖ろしきまゝ聲立て、逃げ出でたるを狗兒の追せまりてあハや噛付かんとせし時しも九歳許りれ一人の男兒學校よりかへるさ、そを見つゝも暫しもためらハぞ、少女子を救取りしこと、少女子ハ繼子なりしと、繼母のひがみるわざ、男兒の家に歸りて母にありし事ども語り出で、少女子の辛なきを憐れむなどいと哀れにかいつけたるなりし。妾も讀もて行く間ふ喉渇れ鼻つまりて遂ふ得堪ぞ、紙の上に數滴の涙をぞ落しぬ。他眼もせて打守りし弟は忽然と「父上」と鋭き聲音して叫びつゝ、父の胸ふ顏推當てぬ。父も感に堪へずてか、弟を抱かれける顏色をやゝへられけん、身をや震はされけん、妾はもはや看上げ得ざりし。母は針をも衣をも取り落しさ乞くゝと打泣玉ひぬ。弟の聲に眼醒しふや、顏そと開いぶかしげふ面さし出せるも婢女なり。母ハ早く見て取りつ梅が（こは妾が名なり）よみたる書のいとあハれふて思ハそも皆泣かされしよ、婢女に告ぐともなく獨言とそなく言ひて、さて「夜のいと寒きに、先づいぬるこそよけれ」と、宣ば忝なしとて退ぬ

己彼の男兒にしろずもあらむと身を繕ひつゝ弟の言ば母は健なる兒よ、幼下しか心懸る者ぞ杯諭玉ふ父も常は嚴げなる口輔ふえも云れぬ和なる笑を含せぬ。寒き夜なれど一團の春を催けりと見ば窓の最明くいつの間にか風ハ止ぬ。「香爐峰の」と宜はそる君のおはそならねど、と打戯れつゝ妾は障子推開けば一天限なう晴れ度り、月漸やく中空ふ近く山とも分かず、野とも分かず、一面にしける玉ハ茵銀世界とほめんも珍らしからぞ不夜城といそんも言陳りぬ。遠き森は烟の如く朦朧として近き林は「春にしられぬ花ぞ咲れける」、疎らなる木立の間ふ見え隱れする茅屋、瓊臺王樓ろと見れバ柴をりくべてくそぶる火の影も銀燭の光とやまがひつべき。初更を告る鐘の音ハ霜夜とてろばかりハ哀れならじ。弟ハ立上りそま彼書の中なる語を誦して「一詩人に鬚毛、下戸に砂糖、猫に」、とゐゝつゝ感じたる面色して母を看上ぐる折しも遥ろに吠る犬の聲す。「あれなり」、と弟ハ叫びければ、各々顔見合せつ、暫時ハ言葉なし。かの歳の春、雪の消る頃より妾ハ物學びすとて都ふ上り、叔父許宿りぬ。二三日前に送り來し弟の文よは此頃も又父母の御ふて余は彼書讀みつ、彼時の事共語り出て過といふ。父上母上、わが弟妾は今百五十里へぞてぬる天の此方にて健よ月日を送りて在り。

右一等賞……………作者藤梅子（トウナイ）

平等に月の光は隈もあい。さえわたッた空は一層小さく見え、きらめく星さへやすまし遥を見える。はるかにひゞく車の音、颯と吹來る木枯、前栽にわなゝく嫩竹。庭のむかふの小坐敷に三人の…はほみ…令嬢。爐をかこんで奥床しくすわッて



居有様、打解て居やうな工會、まるで泉水の氷とは反對でよその見る目も羨ましい。さま〳〵の話しもはや半を過ぎ、いろ〳〵の慰みも一通り終つた樣子でトランプも出て居れば小說も出て居、女學雜誌やいらつめも出て居る。

「ほんとふ今夜ハ奇遇…妙でしたあとねエ、わたしら來ましたところへまさ竹野さんら御出とハ、ねエ梅田さん」。

「さうよ、松本さん、あさしは本當にうれしいのよ」。

眞實のよろこばしさをバその顔らあきらろに代表して居る。

「梅田さん、うれしいといへば貴娘先頃のいらつめハ御手際でしたねエ」。

「あの何です。はア謎……おほ……ほんの僥倖で」。

「わさしハ困ッちまッたのよ、どうしても當らないでさア。どうしても貴娘にハ叶ひませんわ。新題の御考も疾に御出來でしやう」。

「冬の夜の團欒ですろ。ゐゝえ、どうして私が」……

「あら否よ、御嫌遜。御かくしなさらずと聞して頂戴よ」。

「ねエ、あなさ、よろしいぢや有りませんか。どうぞ、どうぞ」。

「ぢやア耻晒しまましやうか、たゞ昨夜はしりがきに……まぶチルガンにも合ハせないんですわ…笑ッちやいやですよ。ね、「ハ」調でおぼろの譜」。

みそらに｜わたる　冬の　月、　梢を｜襲ふ　寒かせも
よそに｜見て、　ハる　待つ　蕾　ゆくすゑも
おあじきえぶ｜ふ　さきいでん、　さきゐでん。

右一等賞……………作者雲のや（ヤマカ）

雪は戸の面にいみじう降りつもり、風さへつよくまどの紙のやぶれを吹きならしつ、手足もこゞえんばかりいといと寒さはげしう覺ゆる冬の夜桶火を中に人々のかたすゞあふべかりにとりまはし火にあたりゐてら四方山のはなしをしもし聞きもしまたわらひそしつゝときうつるまゝにひと〴〵頰耳あからみ、からだはのめき、うちくろぎ、それまゝまろびてうまひするもあり。すべて寒さうちわすれぬ。かばかり樂しきことはさむそらの冬の日にはあらじ。さてかくて寒き冬のそらにこそたき火にまれ、埋火にまれ、火といへは人々ねとめでもてはやそべけれ。さて夏のやゝあつき日にはたえてみむきもせす、いみきらひて遠ざくるは吾も人もあすあやにて、まは時候のかわりにつれて左はあるべき理りあれば、是非もなきされど。吾も人もおのが身のいと難澁なれるとき人に救はれ、そのをりはいかに難有こととおもふとも己がみのまゝなるにつれてはやそのいにしへの恩をはうちわすれ、夏の日の火とともはかなくしくあらん事こそかなしく〳〵もいまそしけれ

右二等賞…………作者一眞齋

記者つゝしんで申上げます　昨年懸賞題を出してから以來去る一月十五日に至るまで歌及び文章でもあわせて百四十餘種の御投寄を受け、實に忝く存しました、　數多い中、いつきも一節あつて面白うござんましたが、さりとて殘らず取上げる譯には無論まありませんから遂にわつかの優劣で比較して以上五種のものを撰擧げました。　これらの方へは御約束のとほり此號からのいらつめを一等賞と一年分及び二等賞は半年分さしあげることにいたしましゝ。　たゞし選に漏れた方々の御作も決して打捨てゝは仕舞ひません、たしかに保存しゝ置く心得ですからその御つもりに願ひます、猶また今度もあらたに左の題を出しますから折角御大作を願ひます

## 題　春の野あそび

三月二十日　しめきり

作は和歌でも唱歌でも文章でも宜しいです。　たゞし滑稽の物は禁物

右一等賞の人へはいらつめ一ヶ年分二等賞の人へは同じく半年分呈上

## 餘興

愛讀の皆樣へ申上ます先月はお正月のとでムいましたから皆樣は無ろしおたのしみが澤山で面白をかしいとにおあれ遊ばされしあらゝ思ひまして餘興は一回お休みいたしましたが此號よりは一回もかゝさず掲載いたします。御解草は固よりのことおもしろき新題御工夫くだされ御投寄を願ひます

左の新謎皆答の方には **金港堂小説一冊** 五題ぶけ解答の方にはいらつめ第二十一號一冊進上いたします答はどうでも理に合てゐますれば お當りといたします　答は解當用紙にお認めなきものは沒書　三月十日〆切

(一)

明るけれバ明るいほど小く暗けれバ暗いほど大きくなる者。

(二)

私は家内中で一番脊丈ゟ高く体は至て不格好でいつも燻つてをり升。私の住家は只今の處でハ繁華な土地か其近所です。

(三)

赤けれバ赤いほど緑色に見え白けれバ白いほど赤く見ゆるもの。

(四)　神田　しづ女

私は皮ばかりで肉はムいません。兎角仲間に好嫌がムいまして厭な奴とは喧嘩をして相手を殺そか自分が死ぬかで兩存は決して出來ません。けれども仲の善い好いたものとは互に体を結付けて一ツなります。しかし悲いことには壽命が短くて長きも一時間早ければ生るゝと死ぬと大概同じです。

(五)　北海道　失名

私の体は随分鍛へた堅固な質ですから常に熱沙の中を徘徊して居りますが平氣ですけれども一人でハ働くことが出來ずさりとて三人寄ても働くことは出來ない脊丈の揃つた合棒が一人あれば随分危險な仕事が出來ます。



## 月報

○憲法發布式　千載の一時なりとて三千九百万の日本臣民が待ちに待ちたる日本帝國憲法は紀元節の佳辰を以て行はせらる旨て御治定ありたりし如く此日午前第一時紀元節御親祭の式あり賢所皇靈殿へ御玉串を奉呈あらせられ　皇祖皇宗皇考の大神靈ニ皇室典範及憲法を制定あらせ玉ひし御告文を奏し給ひ午前七時を以て御式全く終り續いて正殿に於て憲法發布式を行ハせらる黒田内閣總理大臣を百官有司を率ゐて式場に班列し　聖上皇后兩陛下出御皇族及御息所之に從ふ君が代の奏樂ありて三條内大臣憲法を納めたる箱を奉し劔璽は勅任侍從これを奉ず　聖上は龍顔ことに麗しく高御座ニ着らせ玉ひ　皇后陛下ハ高御座の右側の御座ニ着らせ玉ひ扈從の親王諸官ハ左右に侍立す内大臣憲法を捧け奉る　聖上これを受けさせられ左の勅語を給ふ

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト並ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ奬順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

終りて憲法を親から内閣總理大臣に御下附あらせ給ふ總理大

臣は列を進みて之を奉受す君か代の奏樂の中に入御各拜禮して退出し式全く終る

○觀兵式臨御　此日は前夜より降り續きたる瑞雪は早朝まては尚止まざりしか正午頃には雲綻びて曦影を漏しければ　聖上皇后宮兩陛下には御治定の如く午後一時宮城御出門御豫定の順路を青山陳兵塲へ行幸觀兵式を天覽あらせらる當日の御鹵簿は國儀式にして　聖上は軍服皇后宮は大禮服を召させられ六龍の鳳輦に御同車あらせらる惣て御鹵簿の壯麗なると目を驚すはかりなりき御道筋には奉迎拜觀の臣民は恰も堵の如く御通輦の際には學校生徒は君か代の曲或も紀元節の歌を謡ひ或は万歳を三疊して寶祚の無窮を祝し奉る拜觀の老若男女は御儀式の莊麗威嚴を拜觀し　天顏の麗しきを仰き奉りて感涙に咽ひあへり

○府中御巡幸　憲法の御發布に付きては人民のよろこひ譬ふるに物なく殊に輦下の民は奉祝の用意は一方ならぬ騷にて恰も狂するが如く當日の賑ひは前代未聞の盛事なりき府民は兼て噂しまゐらせし府中御巡幸の事は模樣換となりたるを遺憾に思ひ翌十二日を以て府中御巡幸あらせられて臣民の至情を充さしめ玉はんことを悃願しまゐらせしに　聖上にも御嘉納あらせられ十二日午後一時三十分御出門京橋日本橋神田下谷區の大通り臣民歡呼の聲の中を　皇后宮陛下御同列上野公園まで御巡幸あらせられぬ當日は府下の民は申す迄もなく長崎青森邊よりも態々拜觀の爲出京したるもの夥しく御道筋は勿論さしもに廣き公園も身動きのならぬ迄に群集して　聖德を頌し奉る

森文部大臣の薨去　十一日大儀を拜觀するの際我文部大臣の鹵簿の中に見えさりしは何故なるか恙もあらせられてやと心痛し居たりしに歸路には文部大臣今朝刺客に遭ひ微傷を受けられたりと聞きて大に驚愕せしが日ならず快愈の日を見るべしと稍慰め居たりしに豈計らんや微傷とは訛傳にて餘程の重傷にて翌十二日午前五時遂に薨去せられたり歡喜の聲の未た耳邊を去らさるに此凶報に接し憾慨に堪へさるなり殊に我文部大臣は就職以來鋭意教育の普及に盡力せられ正に學校の面目一變せんとせるに當り此不慮の毒刃に罹りて薨去せらる獨大臣の爲に之を惜むのみならず我教育の爲我國家の爲に惜むものなり

○京都高等女學校　全校は現今生徒數殆と四百名もありて彌々盛大に趣くは世人の知る所なるか今般更に教場幷に寄宿舍を增加し廣く生徒を募集し一層規模を擴張せらるゝに付てはすでに豫備科の學期は從來一ヶ年なりしを今後は二ヶ年とせられたり其趣意は同校の規則にては高等小學第二年級卒業のもの即ち滿十二歲より本科第一年級へ編入すへき程度なれども從前の經驗にても高等小學第二年級卒業者の學力直に本科一年級へ編入する能はす尚一ヶ年間豫備科に入れ置き學力補修を要するもの多しこれ蓋し小學の課程は高等女學科の楷梯となすの目的にて組織するにあらずして小學は小學のみの應用に止まるものなれば自ら同校の如き課程を聯絡せさるに由るなるべし故に這般豫備科二ヶ年を置き尋常小學科卒業の者



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を蒐集し來る四月より入學せしめ二ヶ年間にて本科に入るの必用なる學科を授け專ら飭力を養ひ其學力をして本科を連絡せしめ以て生徒學業の速進完美を圖らるゝに在りて即ち豫備科とは滿十歳の者を入學せしめ滿十二歳にて本科に入り滿十六歳にて全科を卒業せしめんとの趣意に出でたるものありと聞く世の進んで高等の教育を受けんと願はるゝ女子諸君の爲めにも實に修學の便を得られたるものといふべし

○天下の女子　學士スピンチル氏ハ毎月水曜日に本郷壹岐坂會堂に於て題號の如き講義を開かる已に本月六日にはペルシアとマルッコの間に住むマホメット教を奉ずる婦人といふを演せられ叉十三日にハアフリカの婦人奴隷を演せらる尚此後に演せらるへきハ

二月二十日　北アメリカの印度婦人
仝　廿七日　南洋諸嶋特にニウジーランドニ於る婦人
三月五　日　印度婦人　甲處女、結婚、世帯、乙寡婦、寡婦燒殺、年齡、

を演者か實地の視察を基礎として演せらるゝ筈なれハ貴婦人方は傍聽せらるべし

○岡山婦人協會　過般來岡山區にては石本仲女外十五名の女史が發起者となりて岡山婦人協會といへるを組織したり是の會ハ同志の婦女相會し處世の要務を講究するを以て目的とし毎月第三日曜日を期して常集會を開き會員相互に懇話をなさしめ兼ては講師に就きて修身育兒衛生家政等の婦人に取りて須要なる講話をば聽かしむる計畫にて而して會員たるべき者も品行端正なる年齡十九歳以上の婦女にして本會の目的を賛成し會員たるの義務を盡し得る者に限ると云ふ



○神田女子實業學校　錦町三丁目七番地の仝校は和洋の技藝學術を折衷し速成を期し女子に適當する實用の學科を教授せる由にて尋常小學卒業生又は否は讀書をなし得への滿十二年以上のものは入學を許し修業年限は二ヶ年にして技藝科には日本服裁縫西洋服裁縫編物圖書あり學術科には讀書美術家事經濟修身衛生英語を教授し生徒は全科或は數科を撰修し得るといふ

## 社告

神田區　齋藤榮　殿

右之方へ差迫り郵便差出度候處居所聞漏いに付御存知之方は乍御手數賃錢先拂を以て弊社まで御報知被成下度希上候也

流行欄　重立つた流行のないため此號に限り此欄を省きます

## 廣告

貴婦人紳士の御愛顧厚きが爲め
今度叉々藥局の改良が出來ます
爲やも花の雲と愛嬌ばかりを賣る店のやうに御評判下されまするは誠にありがたい事では御座いませぬ。もと手前店は免許藥舗で初め店を出しますとき。なんでも商ひを擴めるには第一名をうらねばならぬ事と考へました處から竹中先生に願ひまして花の雲といふ小意氣な藥を。こしらへましたので。これはけして。もうける積りでも。なんでもなく。たゞ名をうる積りで實際内幕はそろ盤玉にはあひません位ひ。ですからよく賣れてはんるに擴まりました事とぞんじます。まかし世の中は御方便なもので全く損をして居るわけでも御座りません。ちりも山となる喩へその利でいろ／＼藥品をかひい

れ店も大ふ賑やかに相なりました扨ざん〳〵品らふえれば手數もかゝりまそ始終藥の試驗もしなければ安心ありません。それでまづあたりまへあら餘計ふ入費と存られますら爲やはなるべく細く長くかたい信用がとりたい計りで特別にてんと帝國大學藥學科に奉職ふさる平野一貫先生に願つて絶えず藥品を檢査ゑていたゞき少しにてもこれハと思ふ藥は賣りませぬ何卒花の雲同樣ふ調合やふ藥の御用を澤山願升先日も改進やまと繪入朝野なぞでもほめて下さいました通り實に手前店の品ハ保險付と申してもよろしい位で厶座いますふ醫者さまハ。はじめふ藥や調合ゟ依賴の方ハ遠方なら一寸端書で注文下さ
れば即刻持參いたします。

神田南神保町四番地
花の雲本舗
免許藥舗
にきなや 敬白

ふきふや營業要目

一諸大家調劑 一醫療器 一香水香油
一洋藥 一職工藥 一シヤボン
一和漢藥 一粉粧品 一繪具染草
一諸大家賣藥 一煙香 一其他いろ〳〵
一花のくも
一花のゆき
一花のかげ

美妙齋主人著
ぬれこ話し

主人公ハ四歳から十二歳迄の男女二人ち小兒。
種類は世話物。骨子は纎子。
趣向は哀れな物。人物は日本人と支那人。

初編 定價金卅五錢 郵税金拾貮錢
發兌 東京本町三丁目十七番地 金港堂

著者ハ美妙齋主人插畫は尾形月耕。
文章は言文一致。回數ハ九回。
親子の情と小供の心。それが此小說の眼目。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

## いらつめ第十八號目次


論　説。　女學の進歩。
小　説。　空行く月第十回(美妙齋作)
講　義。　用器畫稽古の仕方。
文藝美術。　文藝。
　樂典初歩(上眞行氏)
　柳櫻都錦繪(立花屋かをる作)
近刊批評。　政黨美談淑女の操。
　三婦人雜誌の批評。
流　行。　松葉小紋=唐松小紋=霰鮎小紋=唐草紋=本字モノグラム=
　香水瓶=秋月の時計=簪=名刺=春着一班。
寄　書。　竹予孃の御許へ。
　へてな。
家　政。　種痘の事。
　受取書を取る事。
　産室の心得。
　衣服の好。
雜　集。　それハ昔これは今。
通信問答。　匿子さまへ=リスナンの効用=鼻血を止める法〇さもゑ女史
　へ=鐵瓶の錆〇石川しづ子さまへ=にきびを去る法=辭儀の
　仕方〇陸中盛岡田舎娘さまへ=顔の赤きを醫す法〇美濃撫等
　女史へ=うつぎ花と卯の花=歯磨に食鹽を用ゆる事〇松岡正
　夢女史へ=蜜柑と葡萄の貯へ法=女子家庭の教育に付て〇貴
　奴孃へ=頭の生際を濃くする法〇阿部梅子令孃へ=痰を止める
　法=聲をうるはしくする法〇小蝶さまへ=傳授所につきて〇
　岡田令孃へ=紫綢に付て疑問の答=熨斗の濫觴
懸賞和歌文章
月　報


## いらつめ第十九號目次


家　政。　いらつめ料理。
　牛乳の良否を鑑定する法。
　レモヤケを治する法。并に別法。
　枯れた聲を治する法。
　呼吸の臭氣を去る法。
　頸椽に垢の上るのを防ぐ法。
小　説。　空行月第十一回(美妙齋主人作)
流　行。　流行物見本摘載。
　東牡丹の櫛。
　かすがひ形の櫛。
　ひゝ入り小紋。
　三味小紋。
　紫銅づくり鏑矢の簪。
　日本字モノグラム五顆。
文藝美術。　新作歌　佐々木弘綱　佐々木信綱
　佐々木光子　山田美妙齋
　枕の草紙さながき。
　柳櫻都錦繪　二齣目
寄　書。　女子の敎育は宗敎に依るの外なきか。
　如何にして女子ヲ敎育すへきや
雜　集。　少婦のため=織物見本帳を製する事=アムモニアの効用=黄
　金と玻璃=極微世界=態度は品行の影=理財の失策=女學校
　の近邊にある男子の下宿屋=まよひ=詩人タッソの美談=節
　儉は收入と同しもの=猫は偏みしにあらず=樂しいホームを
　持つ秘傳=言文一致体の雜誌
新刊批評。　浮世の巷=もしや草紙=共存の夢=中原の鹿=めぐりあひ=
　初戀=因果=蓮葉娘=月氣兩面鏡=愛府叛亂=新小説=細君
　ユーベル
通　信。　初めて織縈を傳ぱた人=濃き眉を薄くする法=齒痛の即効藥
　=パンの食ひ方=秘密の贈物=名刺=女の男帯=履價の洗濯
　=手輕なる油拔法=剛き髮毛を柔にする法
月　報。



いらつめ

| | |
|---|---|
| 發兌 | 毎月廿五日に發兌すへし |
| 定價 | 一冊八錢=半年(六冊)四十五錢=一ヶ年(十二冊)八十錢 |
| 郵稅 | 一錢=六錢=十二錢 |
| 合計 | 九錢=五十一錢=九十二錢 |
| 郵便爲替 | 郵便爲替は拂渡局名欄内に(神田郵便局)と記し受取人欄内に(神田駿河臺南甲賀町八番地成美社)と御認め被下へくハ又郵劵代用ハ郵便爲替の無き地に限り一割増なれハ妨なし　但し一錢切手ニ限る |
| 見本 | 見本一冊御入用の方は一錢郵劵九枚にて發送可仕候 |

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

東京神田區駿河臺南甲賀町八番地

發行所　成美社